三雲・井原遺跡Ⅴ

－ 屋敷・下西地区の調査 －

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第 90 集

2006

前原市教育委員会

標高シール
37.60m 38.70m 36.10m 36.10m
36.10m 36.10m 36.10m
37.40m 36.20m 36.20m 36.20m
36.20m

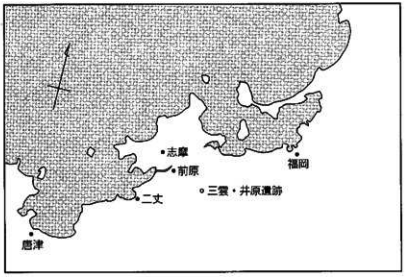
三雲・井原遺跡Ⅴ

－ 屋敷・下西地区の調査 －

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第 90 集



2006

前原市教育委員会

序　文

前原市は豊かな山海の豊かな自然と、有史以来連綿と繰り広げられた歴史に彩られた田園都市です。

市内には縄文時代から近世にいたる多くの文化遺産が市内に残されており、その数は500箇所に及びます。これらを保存するとともにその活用を推進するため、平成10年に前原市内文化財整備基本計画を策定しました。この計画の柱の一つが「伊都国」の拠点集落である三雲・井原遺跡の保存・整備の推進です。

三雲・井原遺跡は中国の歴史書である『魏志倭人伝』に記された「伊都国」の王都とされ、三雲南小路遺跡、井原鑓溝遺跡、平原遺跡はその繁栄を象徴する歴代王墓として、常に考古学研究者の関心を集めています。

前原市ではこの王都の解明と早期の史跡指定をめざして平成６年度から継続して発掘調査を実施しております。

今報告書では、そのうち平成12年度から行なっている屋敷地区ならびに下西地区についてその調査成果をまとめたものです。

本書が、三雲・井原遺跡の解明に、また、文化財保護思想の普及啓発の一助となれば幸いです。

平成18年３月31日

前原市教育委員会
教育長　菊竹利嗣

例　言

1．本書は前原市教育委員会が実施した三雲・井原遺跡の重要遺跡確認調査に伴う第５冊めの発掘調査報告書である。

2．現地の発掘調査および資料整理は平成12年度から17年度にかけて国、県の補助事業として前原市教育委員会が実施した。

3．本書の執筆分担は次の通りである。また、目次にも執筆者を記載している。

Ⅰ．	岡部裕俊
Ⅱ．１．	岡部裕俊
２．	岡部裕俊
３．(1)、(7)	岡部裕俊
(2)～(6)	牟田華代子
Ⅲ．まとめ	牟田華代子

4．本書で使用した１／50,000地図は国土地理院地図を使用した。
　また、１／7,500分の地形図は前原市都市計画図（平成14年11月調整）を使用した。

5．本書に使用した遺構実測図は、屋敷500番地を岡部裕俊、その他を牟田華代子、江野道和、平尾和久、江崎靖隆が作成し、製図は友池真由美が行なった。遺物の復元は川上辰子、柴田由美子が行った。遺物実測図については、屋敷500番地と青銅器鋳型を岡部が、その他は山崎賀代子、牟田、名取さつきが作成し、製図は友池、牟田、岡部が分担して行なった。
　なお、遺構の撮影は屋敷500番地を岡部、その他を牟田が行い、遺物写真の撮影は楢崎直子が行った。発掘現場の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表壇睦夫）に、青銅器鋳型写真、土製人形、メノウ製勾玉の撮影は（有）文化財写真工房（代表岡紀久夫）に委託した。

6．本報告書に係る記録写真、実測図、遺物は伊都国歴史博物館で収蔵保管する予定である。

7．本書の編集は岡部、牟田が行なった。

8．本書を作成するにあたり、下記の機関及び方々の御協力、御教示をいただいた。記して感謝いたします。
　九州大学文学部考古学研究室、福岡市埋蔵文化財センター、福岡県立糸島高等学校、
　片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）、設楽博巳（駒澤大学）、疆宜田佳男（文化庁記念物課）、
　比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）、松井和幸（北九州いのちのたび博物館）、
　水野正好、宮本一夫（九州大学）（五十音順）

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたる経過 ……（岡部） 1

2．調査の組織 ……（岡部） 2

Ⅱ．調査の記録

1．三雲・井原遺跡の位置と歴史的環境 ……（岡部） 4

2．屋敷・下西地区の調査経過 ……（岡部） 8

3．調査区各説 …… 10

(1) 屋敷500番地の調査（平成12年度） ……（岡部） 10

(2) 下西534番地の調査（平成14年度） ……（牟田） 18

(3) 屋敷488番地の調査（平成15年度） ……（牟田） 34

(4) 屋敷489番地の調査（平成15年度） ……（牟田） 39

(5) 下西528・535番地の調査（平成16年度） ……（牟田） 59

(6) 屋敷495・1261番地の調査（平成17年度） ……（牟田） 64

(7) 三雲・井原遺跡出土青銅器鋳型について ……（岡部） 67

Ⅲ．まとめ （牟田）

1．屋敷・下西地区の遺構分布について …… 70

2．住居跡出土の土製人形について …… 72

図 版 目 次

図版1　a．屋敷500番地全景（直上から）
　　b．屋敷500番地全景（北西から）
図版2　a．屋敷500番地2号住居（西から）
　　b．屋敷500番地3号住居土製紡錘車出土状況
　　c．屋敷500番地1号甕棺墓
　　d．屋敷500番地1号土坑
　　e．屋敷500番地1号溝
　　f．屋敷500番地1号溝土器出土状況
　　g．屋敷500番地1号溝土層断面
　　h．屋敷500番地2号土坑、3号土坑
図版3　a．下西534番地から三雲南小路遺跡を望む（北から）
　　b．下西534番地調査区全景（真上から）
　　c．下西534番地区画溝コーナー部（真上から）
図版4　a．下西534番地区画溝（東西方向）土層断面（西から）
　　b．下西534番地区画溝（南北方向）土層断面（北から）
図版5　a．下西534番地区画溝（南北方向）土器出土状況（北から）
　　b．同上（南部近影）
　　c．同上（西部近影）
　　d．同上（東部近影）
図版6　a．下西534番地1号住居全景（北から）
　　b．下西534番地1号住居南西隅土器出土状況（北から）
　　c．下西534番地1号住居床面出土袋状鉄斧（南から）
　　d．下西534番地高杯出土状況（北から）
図版7　a．屋敷488・489番地と下西地区（南から）
　　b．屋敷488・489番地（真上から）
　　c．屋敷488番地（真上から）
図版8　a．屋敷489番地全景（東から）
　　b．屋敷489番地1号住居（西から）
　　c．屋敷489番地2～5号住居、1号掘立柱建物（東から）
図版9　a．屋敷489番地4号住居（南から）
　　b．屋敷489番地4号住居メノウ製勾玉出土状況及び5号住居土器出土状況（南西から）
図版10　a．屋敷489番地4号住居土器出土状況（東から）
　　b．屋敷489番地4号住居メノウ製勾玉出土状況
　　c．屋敷489番地4号住居土製人形出土状況（北から）
　　d．同土製人形（男性）出土状況（南から）
　　e．同土製人形（女性）出土状況（北から）
　　f．屋敷489番地5号住居土器出土状況（南から）
図版11　a．屋敷489番地4、5、14号住居（南から）
　　b．屋敷489番地13号住居（南から）
　　c．ハマグリ形土製品出土状況（東から）
図版12　a．下西528番地から屋敷地区を望む（西から）
　　b．下西528番地1号掘立柱建物と区画溝（遺構検出時）（南から）
　　c．下西528番地区画溝及び1号土坑（南から）
図版13　a．下西528番地区画溝コーナー部（北から）
　　b．下西528番地区画溝土層断面（北から）
　　c．下西535番地西トレンチ（西から）
　　d．下西535番地東トレンチ（北から）
図版14　a．屋敷495番地全景（北から）
　　b．屋敷495番地1、2号住居（北東から）
　　c．屋敷495番地東拡張区全景（北から）
　　d．屋敷495番地北拡張区全景（南から）
　　e．屋敷1261番地全景（北から）
図版15　出土遺物①
図版16　出土遺物②
図版17　出土遺物③
図版18　出土遺物④
図版19　出土遺物⑤
図版20　伝三雲ナノ川出土広形銅矛鋳型（糸島高校蔵）
図版21　伝三雲川端出土広形銅矛鋳型（金龍寺蔵）
図版22　御床松原遺跡出土土製人形

挿　図　目　次

第１図　三雲・井原遺跡の位置と周辺の弥生～古墳の集落遺跡及び主要前期前方後円墳 …… 5
第２図　三雲・井原遺跡の範囲と主要遺構、遺物出土地点 …… 7
第３図　下西・屋敷地区報告地点位置図（1／2000） …… 8
第４図　屋敷500番地遺構配置図（1／100） …… 9
第５図　屋敷500番地１号住居実測図 …… 10
第６図　１号住居炉実測図（１／20） …… 11
第７図　屋敷500番地２号、３号住居実測図（1／60）、土坑詳細（1／30） …… 11
第８図　屋敷500番地１～３号住居出土遺物実測図（1／4、1／2） …… 12
第９図　甕棺墓（1／30）及び土器実測図（1／4） …… 13
第10図　１号土壙実測図（1／30） …… 14
第11図　１号溝実測図（1／30） …… 15
第12図　１号溝出土土器実測図（1／4） …… 15
第13図　２号、３号土坑実測図（1／30） …… 16
第14図　下西534番地遺構配置図（1／120） …… 19
第15図　下西534番地１号住居実測図（1／60、1／30） …… 21
第16図　下西534番地１号住居出土遺物実測図（1／4） …… 22
第17図　下西534番地１号、２号掘立柱建物実測図（1／60） …… 23
第18図　下西534番地南北方向区画溝土器出土状況（1／30） …… 25
第19図　下西534番地区画溝土層断面図（1／40） …… 26
第20図　下西534番地区画溝（東西方向）出土遺物実測図（1／4、24は1／2、25は1／3） …… 27
第21図　下西534番地区画溝（南北方向）出土遺物実測図①（1／4、26は1／6） …… 30
第22図　下西534番地区画溝（南北方向）出土遺物実測図②（1／4） …… 31
第23図　下西534番地区画溝（南北方向）出土遺物実測図③（1／4） …… 32
第24図　下西534番地２号溝実測図（1／80） …… 33
第25図　下西534番地包含層出土遺物実測図（1／4） …… 34
第26図　屋敷488番地遺構配置図（1／80） …… 35
第27図　屋敷488番地１～３号住居実測図（1／60） …… 37
第28図　屋敷488番地４号、５号住居実測図（1／60） …… 38
第29図　屋敷488番地１～５号住居出土遺物実測図（1／4） …… 39
第30図　屋敷488番地１号土坑実測図及び出土遺物実測図（1／60、1／4） …… 40
第31図　屋敷489番地遺構配置図（1／100） …… 41
第32図　屋敷489番地１～３号住居実測図（1／60） …… 43
第33図　屋敷489番地４号住居実測図（1／60） …… 44
第34図　屋敷489番地４号住居土製人形出土状況実測図（1／6） …… 44
第35図　屋敷489番地４号住居柱穴内メノウ製勾玉出土状況実測図（1／10） …… 45
第36図　屋敷489番地４号住居土製人形、メノウ製勾玉実測図（1／2） …… 45

第37図　屋敷489番地１～４号住居出土遺物実測図（1／4）…… 46
第38図　屋敷489番地５号住居実測図（1／60、1／30）…… 47
第39図　屋敷489番地５号住居出土遺物実測図（1／4）…… 48
第40図　屋敷489番地６～８号住居実測図（1／60）…… 50
第41図　屋敷489番地９～12号住居実測図（1／60）…… 52
第42図　屋敷489番地６～10号住居出土遺物実測図（1／4）…… 53
第43図　屋敷489番地13、14号住居実測図（1／60）…… 54
第44図　屋敷489番地１号掘立柱建物実測図（1／60）…… 55
第45図　屋敷489番地１号、２号溝実測図（1／80）…… 56
第46図　屋敷489番地13号柱穴出土梯形鉄斧実測図（1／3）…… 56
第47図　ハマグリ形土製品出土状況及び遺物実測図（1／20、1／4）…… 57
第48図　下西528番地遺構配置図（1／120）…… 58
第49図　下西528番地１号掘立柱建物実測図（1／60）…… 59
第50図　下西528番地区画溝実測図及び出土遺物実測図（1／20、1／4）…… 60
第51図　下西528番地１号土坑及び出土遺物実測図（1／40、1／4）…… 61
第52図　下西535番地遺構配置図及び土層断面図（1／60）…… 62
第53図　屋敷495番地、1261番地遺構配置図（1／80）…… 63
第54図　屋敷495番地１号、２号住居及び出土遺物実測図（1／40、1／4）…… 64
第55図　屋敷1261番地西壁土層断面図（1／80）…… 65
第56図　屋敷1261番地２号溝及び出土遺物実測図（1／80、1／4）…… 66
第57図　伝三雲井ノ川出土銅矛鋳型実測図（糸島高校蔵　縮尺1／3）…… 68
第58図　伝三雲川端出土銅矛鋳型実測図（金龍寺蔵　縮尺1／3）…… 69
第59図　屋敷・下西地区の旧地形と区画溝配置図（1／1000）…… 71
第60図　御床松原遺跡出土土製人形実測図（1／3）…… 72

付　図　目　次

付図　下西・屋敷地区調査地点遺構配置図（1／800）

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたる経過

前原市を中心とする糸島地方は、わが国における弥生～古墳時代の大陸文化の受容、および列島各地への伝播の基点として、また朝鮮半島や大陸との政治、文化交流の一大拠点としてわが国の古代史研究上欠くことのできない地域として広く知られる。

とりわけ、中国の歴史書『魏志倭人伝』に記される「伊都国」の繁栄した弥生時代後期～古墳時代初頭については多数の集落遺跡が発見されている。なかでもその中心となるのが当地方で最も広い怡土平野の中央に位置する三雲・井原遺跡である。三雲・井原遺跡の発見は古く記録として登場するのは江戸時代天明年間の井原鏡溝遺跡における銅鏡副葬の甕棺墓の発見である。その後三雲南小路遺跡の発見が続く。明治期以後、中山平次郎、原田大六らによる既存資料の分析・考証が重ねられた後、昭和49年度から始まった三雲地区県営圃場整備事業により、本格的な考古学的調査のメスがこの地に入れられた。当時「伊都国発掘」としてマスコミでも大きく取り上げられた。

近年、北部九州のクニグニの各拠点集落の調査が進むとともにその保存・活用を望む声が高まるなか、前原市でも三雲・井原遺跡の構造解明と将来の史跡指定をめざし、平成６年度から国庫補助事業として重要遺跡確認調査事業を開始した。その手始めに三雲南小路遺跡の構造確認調査に着手するとともに、翌平成７年度には三雲遺跡等発掘調査指導委員会も組織され、充実した指導体制の下、調査を継続して実施している。

指導委員会では三雲・井原遺跡における当面の調査の重点課題として、史跡指定を念頭においた資料の収集が必要との観点から以下の課題が提起された。

① 環濠等の確認による三雲・井原遺跡の集落範囲についての検討

② 三雲南小路遺跡の規模・構造の解明と井原鏡溝遺跡の所在の確認

③ 屋敷地区周辺を中心とする青銅器生産の解明

これらの解明に向けて調査地点を南小路、ヤリミゾ、八龍、屋敷地区およびその周辺地域にしぼり継続的に調査を実施してきた。

三雲南小路遺跡では平成12年度の確認調査で１・２号甕棺の北と東から相次いで周溝が確認され、従来確認されていた西側の周溝とあわせて検討し、東西、南北長がいずれも33mを超える方形プランの墳丘墓であることが確定した。

井原鏡溝遺跡の所在についてはこれまで十分な情報をえることができなかったが、平成16年度には大字井原字ヤリミゾ地区で県道拡幅整備工事に伴い実施した発掘調査で、木棺墓、石棺墓、甕棺墓により構成された弥生後期の墓群が発見され、三面の後漢鏡片、ガラス玉多数などが出土した。弥生後期中頃の三雲・井原遺跡における有力層の墓群と推定され、今後の調査の進展が期待されている。

三雲・井原遺跡の規模の特定にかかる有力な手法として設定した環濠の調査については、これまで石橋、サキゾノ、八龍地区など、遺跡東南部で集中的に幅３mを超える大溝が確認されている。今後、相互の溝のつながり、延長方向を調査・検討することにより集落域の区画溝の可能性を模索しているところである。八龍地区では今年度の調査で南西から北東に向けて延びる弥生中期～後期にかけての二条の大溝が確認することができた。サキゾノ・石橋地区で確認している大溝とあわ

せ、今後はその伸長方向、相互の対応関係の確認が重要となってきた。

青銅器生産に関する情報としては、これまでに発見された3個の武器形青銅器の出土地点が有力候補となる。九州大学が所蔵する広形銅戈の鋳型（国指定重要文化財）の出土地は「屋敷出」とされているが「屋敷口」という地名は実在せず、類似する地名として大字三雲字「屋敷」地区が有力候補地と考えられる。三雲地内ではこのほかにも「屋敷」のつく地名としては「中川屋敷」、「楠屋敷」があるものの、続く糸島高校所有の銅矛鋳型が「井ノ川」、市内高祖の金龍寺が所蔵する銅矛鋳型が「地蔵川原」出土と伝えられていて、これら地名がいずれも三雲・井原遺跡の北西部、瑞梅寺川の東岸一帯に集中していることから、台地の縁辺部に位置する「屋敷」地区と隣接する「下西」地区が青銅器生産工房ゾーンとして、最も有力な候補地と考えられる。

平成14年度には、下西534番地で青銅器生産にかかる工房の調査を行なったところ、断面V字形の東西方向にのびる幅3m超の大溝を検出した。大溝は調査区の東端で南に屈曲しさらに伸びていた。このことから下西地区に方形の区画溝に囲まれた空間が存在する可能性が浮上し、新たな課題として以下が追加された。

④下西・屋敷地区における大溝に区画された空間の解明

平成15～17年度にかけて、大溝の延長方向の確認調査を継続して実施している。この成果については本報告書で詳細に報告する。

（参考文献）

青柳種信 『柳園古器略考』1930

柳田康雄　小池史哲編『三雲遺跡』Ⅰ1980　福岡県教育委員会

柳田康雄 『伊都国を掘る』2000　大和書房

岡部裕俊　牟田華代子 『三雲・井原遺跡Ⅱ』2002　前原市教育委員会

牟田華代子 『三雲・井原遺跡Ⅲ』2003　前原市教育委員会

2．調査の組織

平成12年度から17年度にかけての調査組織は以下のとおりである。

三雲遺跡等発掘調査指導委員会

委員長	横山浩一（～平成14年度）
	西谷　正（平成15年度～）
委　員	坪井清足（～平成14年度）
	西谷　正（～平成14年度）
	工樂善通（平成15年度～）
	町田　章（～平成16年度）
	田辺征夫（平成17年度～）
	柳田康雄（平成15年度～）
	橋口達也（平成14年度～）
	小西龍三郎

前原市教育委員会

総　括

教育長	三島利彦（～平成13年５月）
	菊竹利嗣（平成13年６月～）
教育部長	上田勇介（～平成14年度）
	久我和彦（平成15年度～）
文化課長	松井　昇（～平成13年度）
	小池史哲（平成14年度）
	鬼木武信（平成15年度～）
参　事	小池史哲（平成12～13年度）
課長補佐	中村鉄弥（平成14年度～）
文化財係長	林　　覚（～平成14年度）
	岡部裕俊（平成15年度～）
調査担当	岡部裕俊　上田健太郎（現兵庫県教育委員会）　牟田華代子（平成12年度）
	岡部裕俊　牟田華代子（平成13～14年度）
	平尾和久　牟田華代子（平成15年度）
	瓜生秀文　牟田華代子（平成16年度）
	江崎靖隆　牟田華代子　楢崎直子（平成17年度）
庶　務	浜地　克（～平成15年度）
	中野幸功　矢野真司（平成16年度～）

発掘調査の実施にあたっては、調査に快諾いただき農地や宅地の一角を調査地として提供いただきました篠盛雄氏、半山武美氏、神武克典氏、中村輝男氏、白水廣一氏ならびに御家族各位に感謝申し上げます。

また、調査にあたり遺跡の重要性をご理解いただき、地元との調整にご尽力いただきました三雲行政区長の半山邦一氏、浅田光男氏、水崎信義氏をはじめとする役員各位、行政区民各位、暑さ寒さ厳しい昨今にも熱心に発掘調査に従事いただいた作業員のみなさんに、文末ではありますが記して感謝の意を表します。

Ⅱ．調査の記録

1．三雲・井原遺跡の位置と歴史的環境

糸島地方は福岡市と佐賀県唐津市の中間に位置する。玄界灘に面した当該地は古くから大陸、朝鮮半島との交流の窓口として栄えたことは周知のことである。

志摩半島部は現在のところ龍頭のようなシルエットを描きながら玄界灘に突き出しているが、弥生～古墳時代においては半島の付け根部に東西両方向から内海が奥深く湾入し、あたかも島のような地形を呈していたとされる。わずかに前原市志登－泊間のみが陸地として繋がっていたとされ、また、海岸線も現在よりも入り組んだ凹凸を呈していたものと推定される。

この玄界灘に突き出した半島が天然の埠頭のように機能し、海岸線に発達した潟状の湾入地形とともに当該地域の弥生期における海を介した経済活動促進の原動力となった考えている。

弥生～古墳時代の当該地方の集落遺跡のうち、深江井牟田遺跡では多数の楽浪系漢式土器が出土し、浦志遺跡では楽浪系漢式土器、三韓式土器が出土している。前原市神在横島遺跡、東遺跡群、志登遺跡群、志摩町御床松原遺跡でも三韓式土器の出土が報告されている。また、上鐙子遺跡、三坂七尾遺跡、今宿五郎江遺跡では、貨泉や半両銭などの中国貨幣の出土が報告されている。これら外来系遺物を出土する遺跡の多くは当時の海岸線に近い位置にあることからも上記仮説を裏付ける。しかし、各々の集落遺跡の想定規模はさほど大きなものではなくいずれも中小規模のもので当該地の中心的集落ではない。

これら海浜部を中心とする集落と対称的なのが当地最大の集落遺跡である三雲・井原遺跡である。当遺跡は糸島地方最大である怡土平野の中央部、瑞梅寺川と川原川に挟まれた段丘上に位置する。集落の規模は現在の県道有田大門線を北限とし、東西は瑞梅寺川、川原川によって形成された氾濫原。南は概ね三雲行政区と井原行政区境周辺と考えるが、弥生時代の墓群が井原行政区側にかかっていることで、集落範囲は井原地区にまで及ぶことは確実である。また所在が確定していない井原鑪溝遺跡の所在がまさにこの境界周辺に所在する。現在の集落想定規模は概測で南北1000m、東西700mの範囲に達すると推定され、当該地で突出した集落規模を有するだけでなく、北部九州の他地域の拠点集落の規模をも上回る。さらに集落と河川の間には水田遺構などの生産遺構の存在も想定される。

三雲・井原遺跡一帯には縄文時代早期から中世まで長きにわたる遺構、遺物が発見されているが、とりわけ注目されるのが弥生時代から古墳時代初頭にかけての様相である。

昭和49年～55年にかけて施工された三雲、井原地区県営整備事業の際に福岡県教育委員会によって行われた遺跡の詳細確認調査では、狭い調査面積にもかかわらず、遺跡の重要性を示す多くの貴重な遺構、遺物が出土している。主な出土品及び遺構の分布状況を第２図に示した。

弥生前期の遺構として注目されるのは加賀石支石墓である。半壊した大形の上石の下に遺存していた主体部の配石遺構内から５本の柳葉形大型磨製石鏃が出土し副葬品を有する支石墓であることが確認された。周辺では碧玉製管玉を副葬品とする２基の弥生前期前半の大形支石墓（二雲石ヶ崎支石墓、井田川会支石墓）が確認されており、三雲・井原遺跡において、弥生時代の早い段階から集落内における階層分化の兆しを垣間見ることができる。また、当該期の遺構、遺物は加賀石、石

弥生後期～古墳前期の主要集落遺跡		副葬品を有する弥生中～後期墳墓	前期前方後円墳	
① 三雲・井原遺跡	⑪ 東五反田遺跡	A 三雲南小路遺跡	a 端山古墳	k 稲葉1号墳
② 井原下町遺跡	⑫ 東遺跡群	B 井原鑓溝遺跡	b 井原1号墳	l 東嶽方C－1号墳
③ 井原屋敷遺跡	⑬ 東高田遺跡	C 三雲寺口遺跡	c 高祖東谷遺跡	
④ 末永遺跡群	⑭ 木津遺跡群	D 平原遺跡1号墓・5号墓	d 御道具山古墳	
⑤ 高祖大鷲遺跡	⑮ 飯源門口遺跡	E 飯氏遺跡	e 潮神社古墳	
⑥ 北新地遺跡群	⑯ 今宿五郎江遺跡	F 泊熊野遺跡	f 有田1号墳	
⑦ 浦志遺跡群	⑰ 泊桂木遺跡	G 上町向原遺跡	g 立石1号墳	
⑧ 潮遺跡群		H 三坂七尾遺跡	h 本林崎古墳	
⑨ 志登遺跡群		I 東二塚遺跡	i 今宿古墳群	
⑩ 神在横岳遺跡			j 津和崎樋殻古墳	

第1図　三雲・井原遺跡の位置と周辺の弥生～古墳の集落遺跡及び主要前期前方後円墳

橋、八龍、柿木地区でも出土しており、遺跡内に小集落が分散的に分布していた様相をみることができる。

中～後期になると集落が集中的に分布する。仲田、サキゾノ、番上地区を中心とする、段丘中央部に集約される。当該地を中心とする一帯から楽浪系漢式土器、東九州、瀬戸内、東海系土器など外来系、他地域の土器が数多く出土するとともに、ファイアンス玉、辰砂、水晶などのまれ少遺物が出土するなど当該期の集落の隆盛ぶりが出土品から窺い知ることができる。三雲・井原遺跡から当時の海岸線までの距離が約6kmほどあるにもかかわらず、外来系遺物が多く出土していることは集落の格の高さを顕著に物語るといえよう。

また、集落周縁部にあたるイフ、寺口、鬼木、加賀石、八龍、上覚、下西、境地区など、東西の段丘縁辺部および集落の南北端にはには甕棺、木棺、箱式石棺墓群などの墓群が集落を取り囲むように形成される。

これとは一線を画するように、弥生中期後半の王墓である三雲南小路遺跡、後期の王墓である井原鑓溝遺跡はいずれも遺跡の南西部の集落より一段高い微高地上に位置している。平成16年度に後漢鏡、ガラス玉を出土した有力層群が発見されたのもこの地であり、一帯が王やこれをとりまく有力層の墓群であった可能性があり、今後の調査の進展が注目されている。

古墳時代になると集落の中心は南部の井原地区側に移動を開始する。その後、かつての集落中心部には糸島最古期の定型化前方後円墳である端山古墳が築かれた。弥生時代以来の伝統的「伊都国」の終焉を物語る象徴的遺構である。

古墳時代の前期以降、集落の中心は井原地区に移行する。三雲八龍、境、上覚地区、井原上学、ヤリミゾ、松井地区では古墳時代前期～中期の竪穴住居群が密に分布する。

なお、古墳時代以後の集落の変遷については、まだ未解明の部分が多く、今後の調査の蓄積を待ちたい。

(参考文献)

下山正一　佐藤吉男　野井英明「糸島低地帯の完新統期における貝化石集団」

九州大学理学部研究報告地質学第14巻第4号1986年

古川秀幸『深江井牟田遺跡』1989年　二丈町教育委員会

常松幹雄『浦志遺跡A地点』1984年　前原町教育委員会

井上裕弘『御床松原遺跡』1980年　志摩町教育委員会

志摩町歴史資料館平成9年度秋季企画展図録『道と交易』1997年　志摩町歴史資料館

伊都歴史資料館平成10年度秋季企画展図録『王がいた証』1998年　伊都歴史資料館

野田純子編『神在横浜遺跡』1998年　前原市教育委員会

柳田康雄　小池史哲編『三雲遺跡Ⅱ』1981年　『三雲遺跡Ⅲ』1982年　福岡県教育委員会

小池史哲編『三雲遺跡Ⅳ』1983年　福岡県教育委員会

柳田康雄編『三雲遺跡―南小路地区編―』1984年　福岡県教育委員会

第２図　三雲・井原遺跡の範囲と主要遺構、遺物出土地点

2．屋敷・下西地区の調査経過

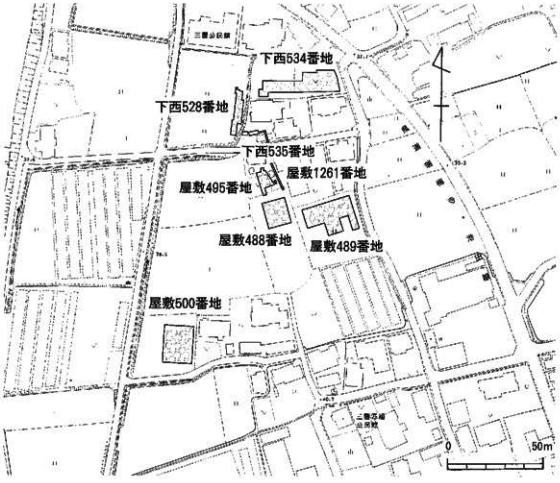
屋敷・下西地区は三雲・井原遺跡の西端、瑞梅寺川東岸の段丘上に位置する。西側には瑞梅寺川の氾濫原が広がり、浸食によって形成された段丘斜面が形成されている。段丘の勾配はきつく、圃場整備以前は標高差は５ｍほどあったが圃場整備と平行して行なわれた河川改修による圃場の客土により段丘下の圃場の高さがかさ上げされたため、現在の比高差は２ｍほどとなっている。

当該地区は圃場整備の範囲から除外されていたこと喪あって、過去に発掘調査が行なわれた箇所は少なく、わずかに昭和55年度に屋敷、下西地区で各一件ずつ個人住宅の建設に伴う緊急調査が行なわれたにとどまる。

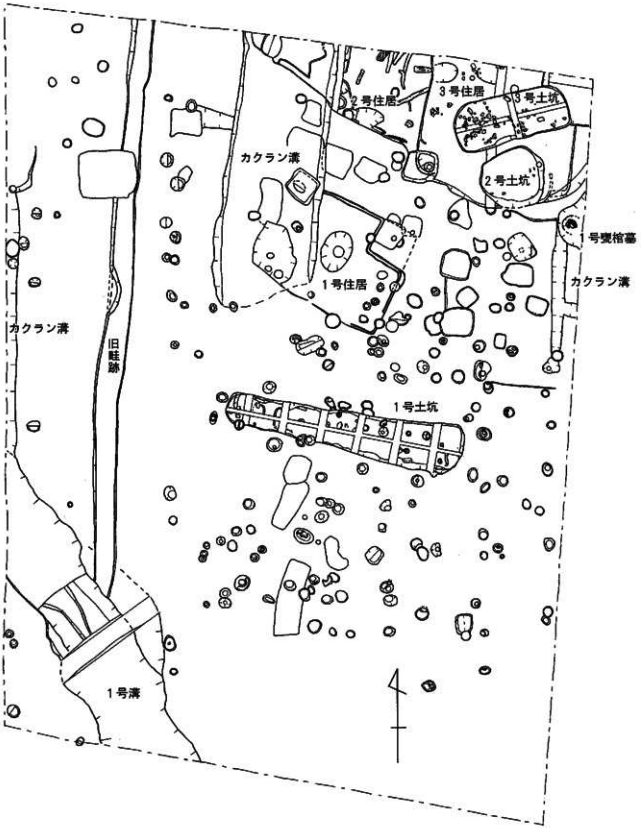
屋敷地区では、12ｍ×10ｍの範囲で調査が行なわれ（Ⅰ－10地区）、縄文時代晩期の土壙１基、弥生時代中期の甕棺墓１基、大溝状遺構と柱穴などが調査された。

縄文時代の土壙は深さ20cmほどで遺構の残りは悪い。出土した縄文土器は晩期前半に相当するもので、本遺跡の仲田Ⅰ－14地区、石橋・サキゾノ地区出土の同時期新相の土器群に対比できる資料とされる。

甕棺墓は全長1.2ｍの小型棺で、下甕には、胴部に二条を一単位とし底部直上から口縁直下まで等間隔に四段に突帯がめぐり外面に黒色顔料を塗彩した異形の樽形甕を用いていた。中期後半に属



第３図　下西・屋敷地区報告地点位置図（1／2000）



第4図　屋敷500番地遺構配置図（1／100）

する。

下西地区は屋敷地区の北東に位置する。発掘調査は昭和55年度に県道の東側で住宅建設に先立って行なわれ（Ⅱ－10地区）、弥生中期中葉の土器溜り（報告書では住居跡状遺構）と12～14世紀の周濠状の大溝が発見されている。

3．調査区各説

(1) 屋敷500番地の調査（平成12年度）

① 概　要

屋敷地区南部の窪盛雄氏所有の水田約300㎡について青銅器鋳造遺構の確認を目的として発掘調査を行なった。調査の結果、縄文時代晩期土器および石器片、弥生時代中期の土壙、柱穴群、弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居３棟、古墳時代の溝一条等を確認した。

② 弥生～古墳時代の遺構・遺物

住居跡

１号住居（図版２－１、第５・６図）

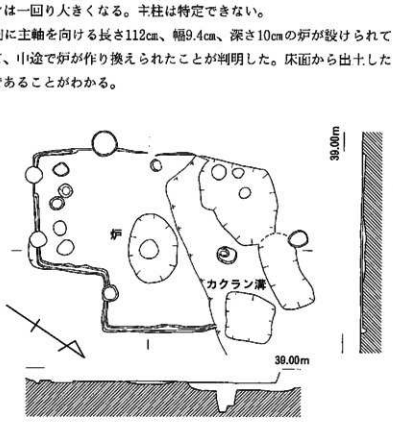
調査区の北部中央で検出した長方形プランの住居で、壁の立ち上がりはほぼ削平され、わずかに床面周囲を巡る周溝により確認ができた。主軸をN34°Wに向け、現状で長さ3.9m、幅2.8mを計るが、周溝の東コーナーがL字に内側に張り出していることから、本来は周囲にベッド状遺構が設けられていと推定され、プランは一回り大きくなる。主柱は特定できない。

床面中央には住居とは直交方向に主軸を向ける長さ112㎝、幅9.4㎝、深さ10㎝の炉が設けられている。炉は上下二層となっていて、中途で炉が作り換えられたことが判明した。床面から出土した土器から弥生後期終末の住居跡であることがわかる。

出土土器（第８図１）　１は小形甕の口縁部である。張り出した胴部からくびれて如意状に口唇部に向けて屈曲する。

２号住居（図版１、第７図）

調査区の北端で検出した住居跡で３号住居跡と切り合い、３号住居跡に先行して掘削されていた。深さは10㎝ほどで南壁下には周溝が掘られていた。遺構はさらに北側の調査区外に続いていた。長方形プランの住居跡と推定され、西南コーナーがかすかに確認できたが東端は３号



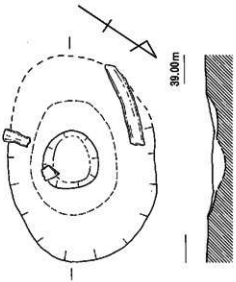
第５図　屋敷500番地１号住居実測図（1／60）

住居跡に削られているため正確なプランは不明であるが、南壁面下に小土壙が敷設されていることから主軸方位は北西－南東方向と推定される。

埋土からは焼木や焼土が多く出土したがいずれも上層からの出土であり消失家屋ではない。また、南壁直下でははは幅70cm、深さ10cmの小土壙を検出した。

床面直上から弥生後期末の土器が出土しており、住居跡の時期は当該期の遺構と考えられる。

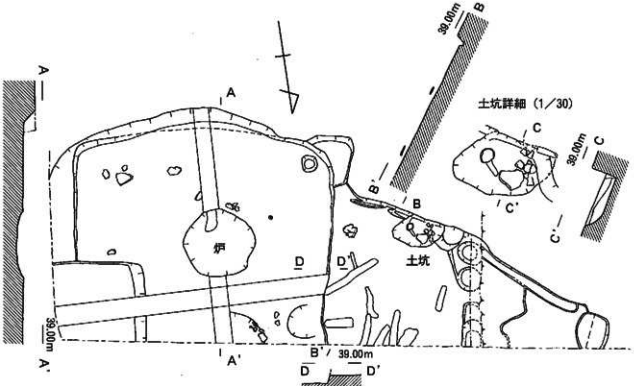
出土土器（図版15、第８図２～６）　２～５は甕である。２は復元口径22.7cm、内外面ともハケで仕上げる。３は復元口径25.8cm、４は30.0cmで、クビレ部に断面この字形の一条突帯がある。突帯と口唇部に連続する刻み目を施している。５は小型の甕で復元口径14.6cm、高さ18cmである。後円部はクビレからなだらかに外反する。底部は丸底化が著しいがわずかに平底の痕跡を残す。内外面ともハケで仕上げる。６は鉢で復元口径11.1cm、高さ9.7cmである。器面は内外ともナデで仕上げる。



第６図　１号住居炉実測図（1／20）

３号住居（図版１、第７図）

２号住居跡の東を切って掘られた住居跡で方形プランを有すると考えられるが、東壁は調査区外へと続く土壙と切り合っていたため、立ち上がりのいちがいまひとつ判然としなかった。深さは15cmほどで、調査区の北東角ではさらに一段深くなっていたことから、他の住居跡、土壙などとさらに切り合っていたものと考えられる。推定する東西幅は4.2mほどである。住居跡の中央部では炉を検出したが、未掘で埋め戻した。



第７図　屋敷500番地２号、３号住居実測図（1／60）

埋土上層から土製紡錘車が出土した。

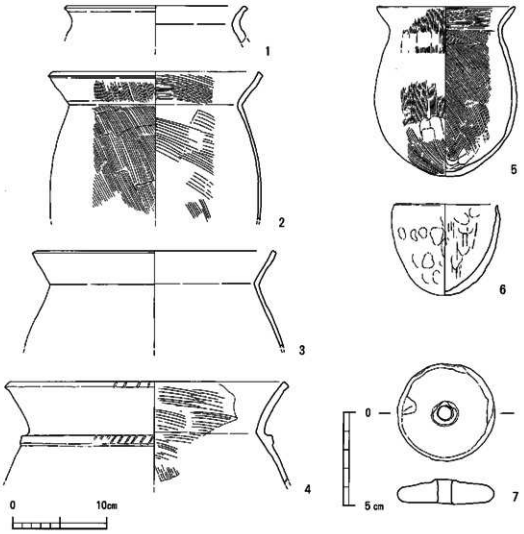
出土遺物（図版15、第８図）　７は土製紡錘車である。径5.0cm～5.2cm、厚さ1.3cm、孔径７mm、重さ20ｇを測る。縁辺はやや丸みを有し、図の上面にむかって若干膨らみ、紡輪通し穴の周囲も上向きに突出する。

甕棺墓（図版２－ｃ，第９図）

調査区の北東部で壁面にかかって検出した不正形の土壙から口頸部を打ち欠いた弥生中期の広口壺が出土した。底部を下して土壙底面から若干浮いた位置で斜めにもたれかかった状態で出土した。破損が著しいが、隣接する屋敷Ｉ－10地区で弥生中期後半の甕棺墓が確認されており、底部に焼成後の穿孔が施されていることも考慮すると小児用の土器棺と推定したが、墓壙が調査区の東にさらに伸びており、祭祀土壙の一部である可能性は拭いきれない。

推定主軸方位はＮ27°Ｅ。坑内に上棺の存在を想定させる土器片が出土していないことから、甕棺であったと考えられる。

出土土器（図版15、第９図）　広口壺の底部から胴上部にかけて半身が遺存する。胴最大径部からクビレ部にかけて強く内傾しながら頸部にいたる。残存高は20cm、胴部最大径は29.2cm、胴部最



第８図　屋敷500番地１～３号住居出土遺物実測図（1／4、1／2）

大径部から肩にかけて２条のM字突帯を施す。外面に黒色顔料を塗布する。底部は焼成後の穿孔が施されている。中期後半の土器である。

土坑

１号土坑（図版２－ｄ、第10図）

調査区の中央部で検出した全長5.65m、幅83～134cm、深さ30～44cmの長細い土坑である。平面は西から東に向かって直線的に幅広となる。主軸はほぼ南北方向にのびる。底面はほぼフラットな状態で、断面はコの字型を呈す。

埋土には炭が多く含まれ、上層に黄褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土が堆積し、焼土や灰・炭化物が多く含まれていたようである。床面に円形の小孔を検出したが、明確に柱穴と考えられるものはない。遺構の性格についても不明である。

埋土から弥生中期～後期前半の土器片が多く出土している。

溝

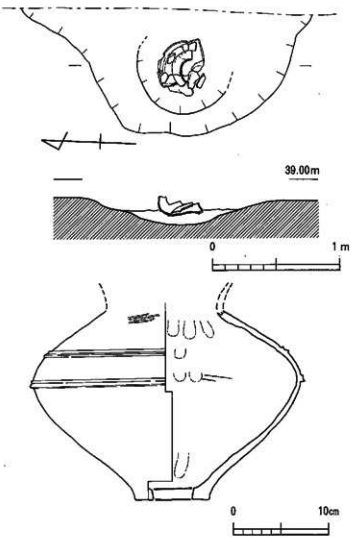
１号溝（図版２－４、第11図）

調査区の南西角を南東から北西に向かって流路をとるように掘削された人工の溝である。断面形態を確認するために溝の中ほどに幅１ｍのトレンチを設定した。トレンチの南壁面では幅1.32m、深さ45cmを測る。断面の形状は浅いＵ字形を呈するが、底面は尖り気味に深くなっている。溝の埋土は粗砂と小礫で、溝が水路として機能していたことを物語っており、底面は流水による侵食によって深く抉られたものと推定される。

溝の土層は大きく二層に別れ、底面には小礫を含む粗砂層が堆積し、上層にシルト混じりの細かな砂が堆積している。溝が一度さらえられて再び使用された後に廃棄され、再度、土砂の流入堆積によって短期間のうちに埋没したものと推定される。

溝東肩に近い埋土上層からほぼ完形の高坏、壷、甕、椀などが角礫群ともに出土した。溝の廃棄に伴う祭祀後に遺棄されたものと推定される。溝の遺棄時期が古墳前期中葉と考えられる。

出土土器（図版15、第12図）　１は甕である。復元口径18.8cm。球形の胴部から内湾しながら開く口縁部に続

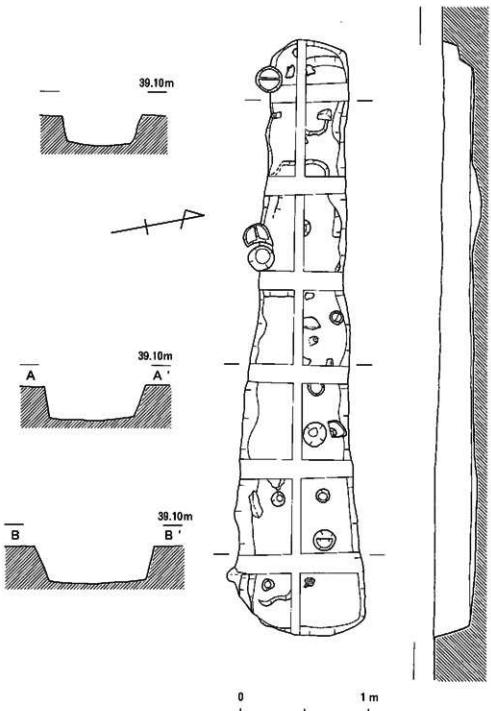


第９図　甕棺墓（1／30）及び土器実測図（1／4）

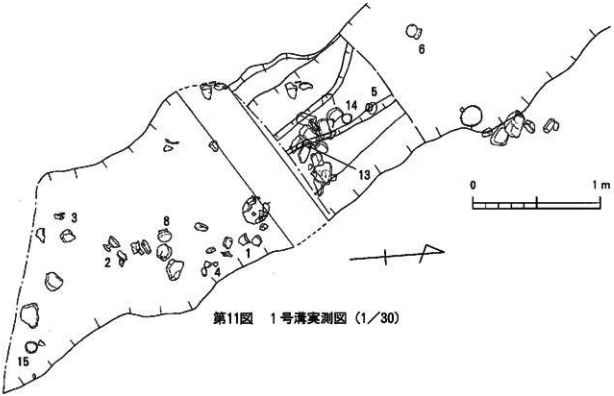
く。外面はハケ、内面は胴上部までケズリで仕上げる。

2は高坏である。高さ12.7cm、口縁径14.4cmを測る。脚裾部は端部に向かって踏ん張り気味に納める。杯部は深く、口縁端部がわずかに外反する。4は柑で口縁部を欠く。胴部最大径は15.6cmを測る。胴部は扁平で口頸部に向かって鋭く外反する。

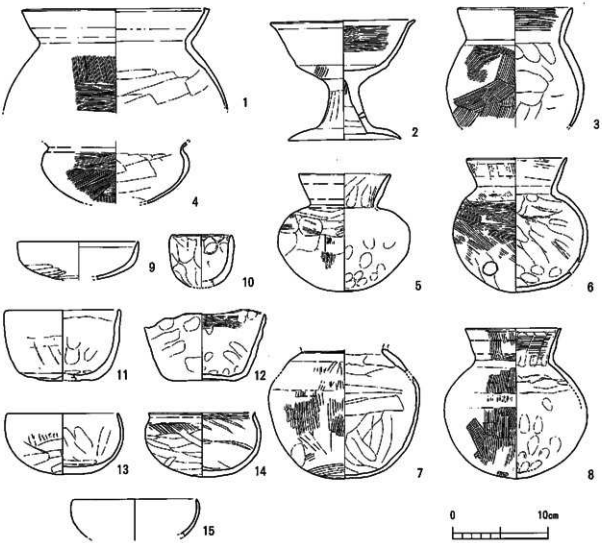
3、5～8は直口壺である。3は口縁径12cm。口縁の外反ぎみに立ち上がる。胴部外面は粗いハ



第10図　1号土壙実測図（1／30）



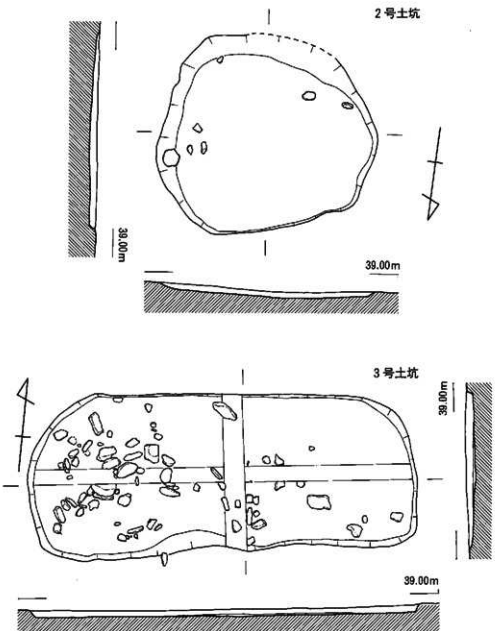
第11図　1号溝実測図（1／30）



第12図　1号溝出土土器実測図（1／4）

ケ、内面は削りで仕上げるが器壁はやや厚手仕上がる。5は口縁径11.4cm、器高12.4cm。外面はナデ押圧仕上げで肩部に一部ミガキを行なう。内面はナデ押圧仕上げを行う。6は口縁径10.4cm、器高14.1cm。外面はナナメ、ヨコハケ、内面はヘラケズリで仕上げる。底部に径1cmほどの穿孔が行なわれている。4は坏蓋片であろう。外面天井部は不定方向のケズリ、内面はナデ仕上げである。7は口頸部を欠く。8は口縁径10cm、器高15.8cmを測る。外面は丁寧なタテハケ、内面はナデで仕上げる。

9～15は椀である。9、15はいずれも破片で杯部が浅く底部に向けてすぼまる。復元口縁径は9が13.6cm。15が13cmを測る。11、12は杯部が深く、底部から口縁部にかけて直線的に開く。内外面ともナデで仕上げており、11は口縁径15.8cm、器高5.9cm。12は口縁径12.6cm、器高7.0cmを測る。13、14は杯部が椀状に膨らみ、14は口縁部を外向きにつまみ出す。外面下半部をヘラナデ仕上げ、



第13図　2号、3号土坑実測図（1／30）

口縁部付近はナデで、内面はナデで仕上げる。13は口縁径11.6cm、器高6.4cm、14は口縁径11cm、器高6.8cmを測る。

③ その他の遺構・遺物

円形小柱穴などから縄文晩期時片、黒曜石剥片が出土している。いずれも小片、砕片で、図示できなかった。

また、調査区の北西端で、3号住居跡を切って2基の土壙を検出した。

2号土坑（図版2－h、第13図）

不正円形プランの土坑で主軸をN104°Eにとり、長軸長1.75m、短軸長1.55m、深さ7cmを測る。埋土から小礫とともに青磁片が出土した。

3号土坑（図版2－h、第13図）

2号土坑の北で検出した長方形プランの浅い土坑で主軸はN103°Eに向けられ、長さ3.05m、幅1.20m、深さ7cmを測る。埋土から多数の小礫とともに白磁椀、土師皿片が出土した。

④ 小結

想定していた青銅器に関する遺構、遺物は当該調査地点では確認することができなかったが、縄文時代晩期遺物群、弥生～古墳時代にかけての遺構として竪穴住居、甕棺墓、中世土坑などを確認することができた。

縄文時代の遺構としては、柱穴群を確認した。遺構面の削平が進行したためか、遺物も少量、砕片であり、住居跡などの確実な遺構は確認にはいたらなかったが、調査区東南部の円形柱穴群からは縄文土器片、石器片が出土しており、これらが当該期の遺構である可能性は高く、一帯に縄文晩期の集落が展開したとする昭和55年度の調査成果を補強することができた。

弥生後期～古墳前期の遺構としては3棟の竪穴住居跡が出土した。調査地点の北側に集中し、南部では住居跡は検出していない。地形的にも調査地点の南には西から入り込んだ小さな谷があると推定しており、これら住居グループにおける南端部にあたると考えられる。

弥生時代中期の遺構として、小児用の甕棺（あるいは祭祀土壙）が出土した。隣接する昭和55年度の調査地点（屋敷Ⅰ－10）でも中期後半の甕棺墓が発掘されており、一帯に当該期の墓地が存在することが確認できた。しかし、その分布密度は希薄で小規模の墓群と考えられる。

古墳時代の1号溝に関連して、昭和59年度の井原上学遺跡の調査の際にも調査地点の西端を北流する古墳時代前期～中期の4条の溝を確認している。溝は調査地点の南北にさらに延長していることも確認しており、これら溝群も1号溝と同じく小礫を含む粗砂の堆積によって埋没していた。埋土の状況からこれらの溝は河川から取水された用水遺構であったと考えられる。時期は古墳時代前期から中期にかけてであり1号溝が機能した時期も含まれること、集落の西縁に掘削されていることから一連の水路遺構であった可能性がある。

(2) 下西534番地の調査（平成14年度）

① 調査の概要

前年度の屋敷地区の調査に引き続き、青銅器工房の検出を目的として調査を実施した。調査区は第14図のように東西に約42m、幅６ｍのトレンチを設定した。旧地形では調査区のそれぞれ東西、北側は一段落ちることから、調査区は微高地の先端部分にあたる。検出遺構は、弥生時代中期末～後期後にかけての区画溝１条、弥生時代後期の掘立柱建物２棟、古墳時代前期の住居１軒、溝１条、である。今回の調査は、確認調査であるため遺構プランの確認を中心に、部分的な掘削で留めているものが多い。よって、時期と内容が明確な遺構の報告を中心に行う。

② 住居跡

1号住居（図版６、第15図）

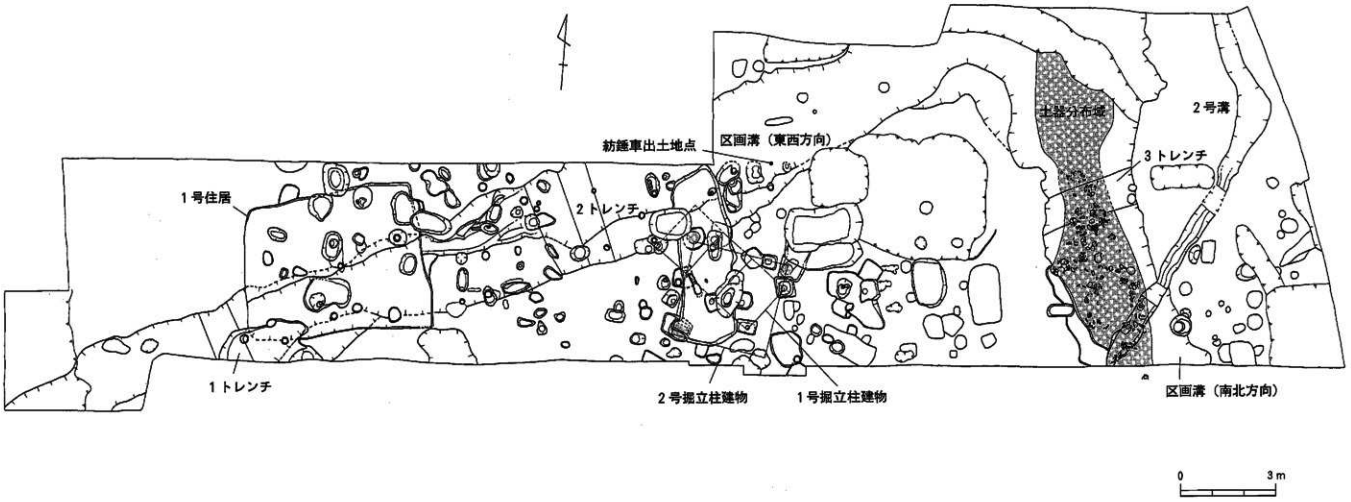
調査区西側で検出した長方形の竪穴住居である。長軸を東西方向に持ち、5.8m×4.6mを測る。第15図の点線内と外で埋土の質が異なり、ある時点で点線内が高まりを持ち周囲が窪む馬蹄形の形状を呈していた可能性がある。住居中央部で焼土を検出しており炉跡の可能性がある。床面まで５～10cmしか残っておらず、遺存状態が悪い。出土遺物は住居南半分の床面直上から出土した。時期は古墳時代前期中頃～後半である。

出土遺物（図版15、第16図）　１～３は甕である。１は口径17.8cm、器高30.7cm。胴部中位に最大径があり球形胴を呈し底部のしまりがない。器壁が厚く、口縁はやや内湾気味に立ち上がり端部はやや内傾する。外面調整の肩部は横ハケ、沈線を施し、他は縦ハケ。内面口縁部は横ハケ、胴部はケズリ。２も同様の甕で、１より尖り底を呈する。口径17.0cm、器高30.3cm。肩部に最大胴形をもち器壁が薄く、１よりやや古い様相を示す。外面縦ハケ、肩部横ハケ。底部にタタキの痕跡が残る。内面はケズリで底部に指押さえ痕が残る。３は、口径19cm。口縁端部は外傾する。外面縦ハケ、肩部横ハケ、内面ケズリ。４は小型丸底壺で、頸部の屈曲と胴部の張りが小さい。口径9.8cm、器高7.1cm。外面調整は細かい不定方向のハケ後一部ナデ消し。内面はケズリ。５は鉢で、口径10.0cm、器高8.0cm。調整は内外面ともにナデ調整である。体部が丸みをもち、口縁部には指押さえによって成形した痕跡が残る。６～８は、ともに高杯の脚部である。すべて柱状部が直線的で裾部が強く屈曲する。６は、脚部径10.6cm、やや柱状部が膨らみエンタシス形を呈す。外面調整は風化、内面調整はケズリである。７は単脚、肉厚の脚部で、外面調整は縦方向の板ナデ、内面はシボリ痕が残る。８は、外面調整はタタキ後縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のヘラケズリ。９は袋状鉄斧で、折り返し部分が一部欠損している。全長8.1cm、幅4.4cm。

③ 掘立柱建物

掘立柱建物は調査区中央部分の比較的標高の高い地点で２棟検出した。柱の掘り方はすべて方形で柱痕が残る。この２棟分以外にも柱痕が残る方形の柱穴がいくつか集中している。これらの柱穴群は調査区南側へさらに広がるものと推測される。

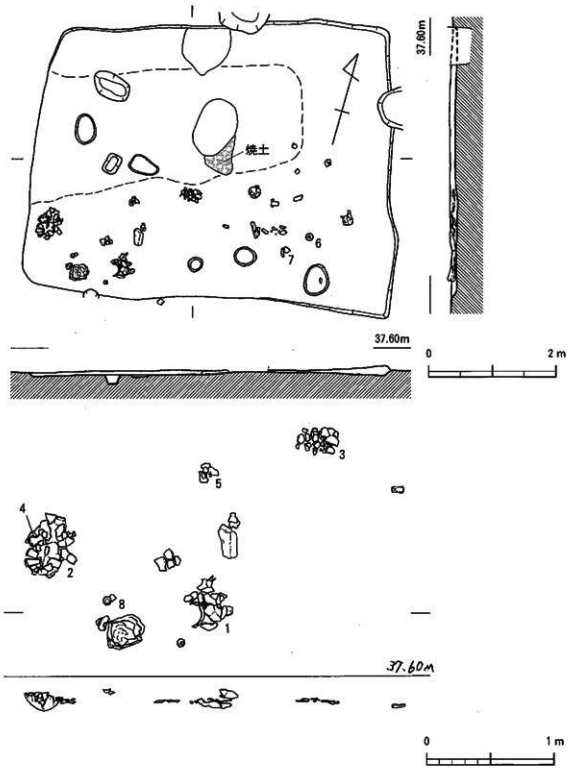
掘立柱建物の時期は、図化できる遺物はないため明確な時期決定が困難だが、区画溝の当初の掘



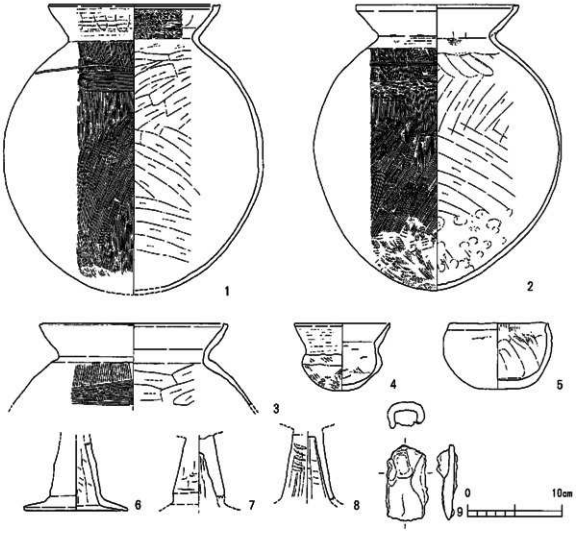
第14図　下西534番地遺構配置図（1／120）

り方（弥生時代中期末頃）を切っており、土師器を含まないことから、弥生時代後期の範疇と考えられ、区画溝と同時期に存在している。

今回の調査区で検出した１・２号掘立柱建物は主軸が区画溝と合わないが、同時期に存在していることから関連を考えたい。また、同時期の柱穴がこの周辺に集中していることから、何度か建て直しが行われた可能性もある。



第15図　下西534番地１号住居実測図（1／60、1／30）



第16図　下西534番地１号住居出土遺物実測図（1／4）

１号掘立柱建物（第17図）

１間×３間で、柱穴の大きさは60㎝×60～70㎝。柱痕の直径は15～20㎝。建物の面積は6.84㎡である。

２号掘立柱建物（第17図）

１間×１間の大型掘立柱建物で、柱間が３ｍ×３ｍを測り、正方形の建物である。柱の掘り方は大きいもので、１×0.7m、柱痕も直径40～60㎝と大型である。北東部の柱穴は北側方向に抜き取り痕かと思われる痕跡が見られる。掘り方も主軸をほぼ南北に向けており、南側は調査区外へさらに延びる可能性がある。

④　溝

区画溝（図版３～５、第18・19図）

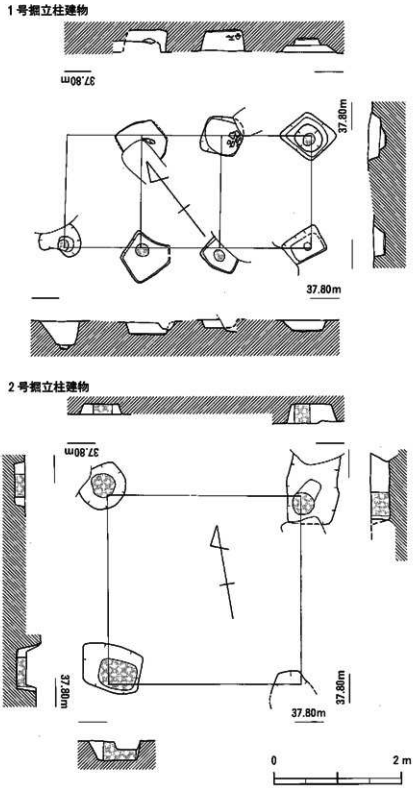
区画溝は調査区西側から東にかけて東西方向に32m伸びたところで南側へ屈曲し、さらに10mほど検出している。全長は、内法42m、外法50mほどである。今回の調査では企掘は行わず全体のラインを確認した後、東西方向の溝内に２ヶ所、南北方向に１ヶ所の計３ヶ所のトレンチを設定した

（西側からそれぞれ１～３トレンチ）。

東西方向（１・２トレンチ）

東西方向の溝は幅2.1～3.3mで、深さは遺構検出面から1.44m、断面形態は、北側の立ち上がり部分に一段テラス状に平坦部をもつ断面Ｖ字形を呈している（第19図）。東西方向の溝の２ヶ所のトレンチそれぞれの最深部のレベルは、１トレンチで36.17m、２トレンチで35.95mを測り、２トレンチの方が20cm強深くなっている。また、遺構検出時に平面プランで暗褐色の埋土のライン（第14図アミカケ部分）と暗褐色に砂質土が混ざる埋土の２ラインが確認された。２トレンチの土層断面で確認してみると（第19図）１～７層は暗褐色～黒褐色粘質土同じ色合いの埋土で、その下８～14層は砂質土混の土層、そして15～19層は砂礫層と３タイプの土質に大きく区分できる。この埋土の違いはおそらく掘り返しによるものと考えられる。

出土遺物の大半は上層、中層に集中し、器種は、甕、鉢、高杯、器台等がみられるが（第20図）、全て破片で接合した遺物も少なかった。下層の砂質土から遺物はほとんど出土していない。土器の他には、最上層から辰砂１点、上層から紡錘車１点が出土した。このように、出土遺物が疎であるものの、時期を特定しうる遺物から当初掘削され



第17図　下西534番地１号、２号掘立柱建物実測図（1／60）

た時期は弥生時代中期末頃で、何度かの掘り返し後、最終的に埋没した時期は後期中頃～後半にあたる。溝が埋没後、古墳時代前期中頃にはその上に1号住居が作られていることから、この時期には溝の痕跡や区画する意識は無くなっていたものと考えられる。最終段階の溝の形態は第7層までで断面形態はU字か逆台形、最深部のレベルは37.41mほどであったと推定される。

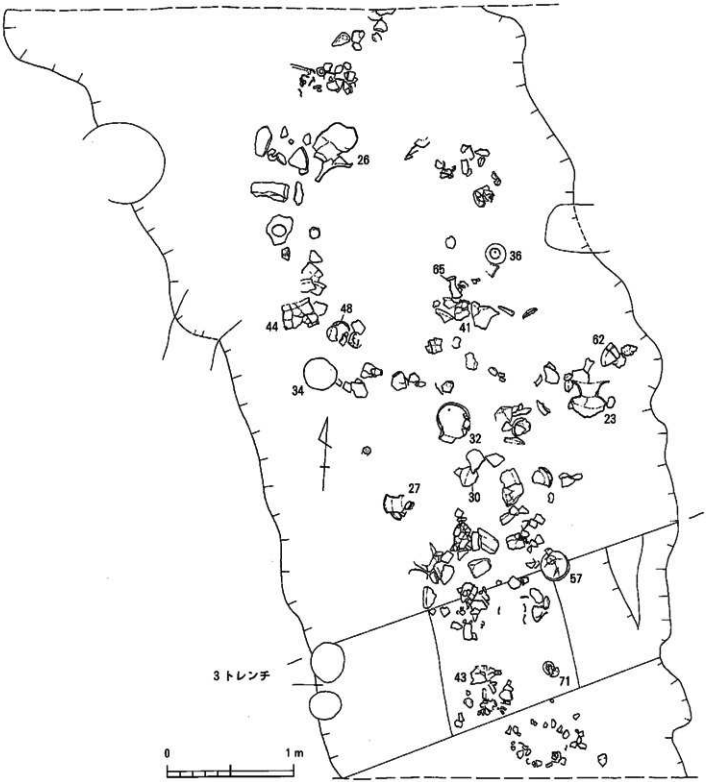
出土遺物（図版15、第20図）　1～13は甕の口縁である。1、2、6～8、12、13は上層からの出土（上層は7層まで、それ以下は下層で取り上げている）。1は口径22.4cm。最上層（1層）から出土し、くの字に立ち上がる口縁を持つ。外面風化、口縁部ヨコナデ、内面は底部から口縁部にかけてのヘラケズリ。2は、口径23.2cmで、外面調整は口縁部、頸部ともにタテハケ、内面は風化。3は、口径28.7cm口縁端部にキザミを持ち、全面丹塗りである。口縁平坦部は横方向のミガキ、他はヨコナデ。4も全面丹塗りの小型の甕である。口径18.3cm。5～13はともに口縁部で、調整はヨコナデ。7、13は内外面ともに丹塗りである。14、15は高杯の杯部と脚部である。ともに下層から出土。14は、杯部径22.3cm、調整はヨコナデ。15は、脚部径10.6cm、外面タテミガキ、内面は丁寧なナデで焼成が良い。16は支脚で、脚部径10.6cm。内外面ともヘラ工具によるナデ調整。17～23はともに底部である。17と19は上層からの出土で他は下層からの出土である。17は、壺の底部で、底径6.7cm、外面タテミガキで丹塗り、内面は粗タテハケである。18は若干上げ底の甕の底部で、底径8.8cm。外面粗タテハケ、内面ナデ。19は底径10.4cm。外面調整はタテハケ、内面はナデ。20は底径8.0cm、外面調整はハケ、内面ナデ。21はミニチュア土器の底部で、底径1.3cm。手づくねで成形。22は、外面調整はタテハケ、内面指押さえ。23は底径8.4cm、内外面ともにナデ調整。24、25ともに最上層からの出土である。

24は辰砂で、重さ0.3g、0.5×0.5cm。暗赤褐色を呈し所々銀色に光る。三雲・井原遺跡内からは3点目である。25は滑石製の紡錘車で、直径3.5cm、孔径0.4cm、重さ12.7gで断面は逆台形状を呈す。

南北方向（3トレンチ）　南北方向の溝は幅2.7～4.1mで、深さは遺構検出面から1.1m、レベルにして36.25mを測り、東西方向の溝と比べて最深部のレベルが若干高くなっている。断面形態は逆台形を呈している（第19図）。平面プランで確認できた東西方向から続く掘り返しのラインは、コーナー部分から土器が集中し始め南へと続いている。土層断面をみてみると逆台形の溝の埋土を漏斗状に切り込んだ層が確認でき、この層が掘り返しのラインと捉えられる。この掘り返しの埋土は礫が混ざる暗褐色の土層で、土器が集中する部分（①）としない部分（①'）に大きく2層に分けられる。さらに灰褐色土層3・4層と砂質土の5・6層に区分でき、この土質の違いも掘り返しによるものと考えられる。

出土遺物は1層に集中しており、壺、甕、鉢、高杯、器台、支脚、蓋、ミニチュア土器など器種が揃っている。これらの遺物は、溝の使用を終えた最終段階に投げ入れられた状況で出土しており、完形のものが多い（第18図）。3～6層からも数点ほど甕の破片が出土しているが、東西方向の溝と同様小片で接合する遺物は少ない。東西方向の溝に比べ同時期の遺物が最上層からまとまって出土していることから、溝の埋没時期は弥生時代後期中葉～後葉頃と判断できる。掘削時期については3～6層の遺物から弥生時代中期末頃と捉えうる。

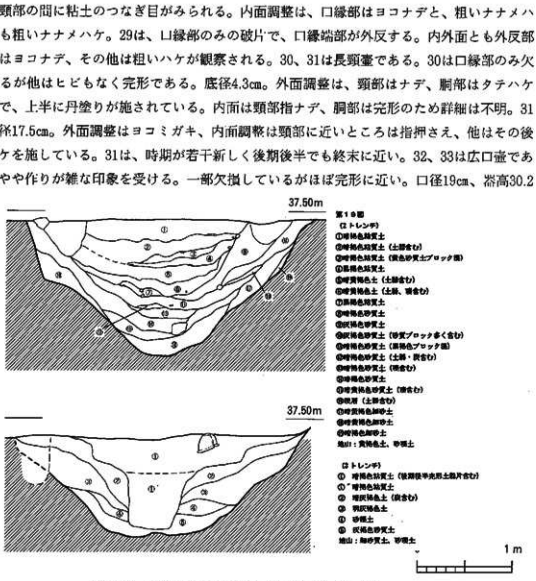
東西方向と南北方向の溝については断面形態が異なるものの、最深部のレベル、造営時期、掘り返しの有無、内側の溝の平面プランや、近接する県道部分の拡幅調査から溝の延長が検出されない



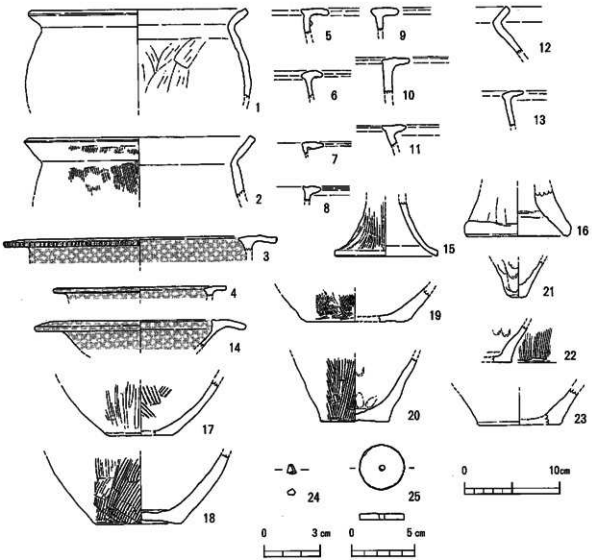
第18図　下西534番地南北方向区画溝土器出土状況（1／30）

こと（付図参照）、などから同一の溝と考えられる。微高地の先端部に立地し、尾根に対して直交する東西方向の溝のほうに、より防御機能の高いV字形の溝を採用している点から、区画された南側に設けられた何らかの施設を護る目的で作られたものと考えられる。現在は宅地のため調査が困難な状況ではあるが、今後の調査によってその性格が明らかになるものと期待する。

出土遺物（図版16・17、第21～23図）　出土遺物の大半は最上層から出土した土器群である。26～35は壺である。26～29は複合口縁壺である。26は大型で、口径31.6cm。外面の口縁部と胴部全体に丹塗りの痕跡が見られる。頸部と胴部に断面三角形の二重の突帯が施されており、頸部が短い。口縁部は屈曲の角度がきつく、胴部の張りも大きく古い様相を示す。外面調整は口縁部細かいナナメハケ、頸部粗いタテハケ、胴部はナナメハケ後板ナデ。突帯から下は細かいナナメハケ。内面調整は、口縁部指押さえ、頸部は細かいヨコハケ、胴部は指押さえと板ナデ。時期は後期前半から中頃か。27は口径19.8cm。口縁部が立ち上がり頸部はしまる。外面調整は、口縁部ナナメハケ後ヨコナデ、頸部はタテハケ後板ナデ消し、頸部突帯から細かい明瞭なタテハケ。内面調整は、口縁部ヨコナデ、頸部上半は板ナデ、下半は指押さえ後粗いナナメハケを施す。28は、口径19.1cm。口縁部がさらに立ち上がり、頸部のしまりも少ない。外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部は粗いナナメハケで口縁と頸部の間に粘土のつなぎ目がみられる。内面調整は、口縁部はヨコナデと、粗いナナメハケ、頸部も粗いナナメハケ。29は、口縁部のみの破片で、口縁端部が外反する。内外面とも外反部分の口縁はヨコナデ、その他は粗いハケが観察される。30、31は長頸壺である。30は口縁部のみ欠損しているが他はヒビもなく完形である。底径4.3cm。外面調整は、頸部はナデ、胴部はタテハケ後板ナデで、上半に丹塗りが施されている。内面は頸部指ナデ、胴部は完形のため詳細は不明。31は、胴部径17.5cm。外面調整はヨコミガキ、内面調整は頸部に近いところは指押さえ、他はその後細かいハケを施している。31は、時期が若干新しく後期後半でも終末に近い。32、33は広口壺である。32はやや作りが雑な印象を受ける。一部欠損しているがほぼ完形に近い。口径19cm、器高30.2



第19図　下西534番地区画溝土層断面図（1／40）



第20図　下西534番地区面溝（東西方向）出土遺物実測図（1／4、24は1／2、25は1／3）

〜31.9cm、底径8.5cm。底部は若干上げ底。外面調整は、口縁部付近タテハケで、頸部に横方向の沈線がめぐる。胴部はナナメハケと底部付近は粘土のナデツケのラインが見られる。底部付近に2.5×2.5cmの穿孔がある。内面調整は、口縁部指押さえとナナメハケ、胴部は板ナデ、底部は指押さえ痕が残る。33は、口径26cmで頸部に四角突帯を貼り付け、肩部の張る形態である。口縁端部はやや膨らみをもつ。外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部タテナデ、突帯部ヨコナデ、胴部不定方向のナデ。外面調整は化粧土をかけてかなりミガキに近いナデを施しており、器表は橙色味が強い。内面調整は、口縁から頸部はナデ、胴部は剥離により不明。34は、口縁部が欠損しているが壺の胴部である。最大胴径は上位にあり、底部にかけてしまり凸レンズ状の底部に続く。底径は8〜9cm。内外面調整は細かいタテハケ後ナデ。底部の形態より後期後半ごろか。35〜38は小型の短頸壺である。35は完形で、口径9.8cm、器高9.6cm、底部はやや歪んで正円ではないが、平底で底径4〜5cm。胎土が細かく雲母が多く混入する。器壁が分厚い。外面調整は口縁部は丁寧なヨコナデ、胴部は粗いタテハケ後細かいヨコハケ、ナナメハケ。内面調整は頸部粗いナナメハケ、胴部上半は工具痕と指押さえが見られる。36はほぼ完形である。口径10.7cm、器高11.5cm、底径4.5cm。口縁が外反し、胴部中位より若干上部に最大胴径をもつ。底部はやや凸レンズ状になる。器壁が薄く、細かい

胎土。外面調整は口縁部ヨコナデ、胴部上半ヨコヘラミガキ、下半板ナデ、底部指押さえ。内面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部板ナデ、底部指押さえ。37はコーナー部分で出土。胴部中位に最大胴径をもつ。底部は凸レンズ状。口径14.1cm、器高13.7cm、最大胴径17.4cm。外面調整は口縁部風化、胴部上半は細かいタテ、ナナメハケ、下半はタテハケ。ハケは底部まで及ぶ。内面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部は幅1.6cmの板状工具によるナデ。底部に螺旋状に工具小口痕が残る。38は、口径8.8cm。造りが粗雑で器壁も厚い。外面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部はナナメハケ、内面調整は、口縁部縦方向に小口痕が規則的に残る。胴部は指押さえと板状工具によるナデ。

39～49は甕である。すべて1層からの出土である。39は中期中葉の壺口縁で、口径21cm。外面調整はヨコナデとナデ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部指押さえ後ナデ。40は、後期中頃の甕で口径25.8cm。外面調整は、口縁部粗いナナメハケ、頸部粗タテハケ。内面調整はナナメヨコハケ。41は、口径26.2cm、残存高17.4cm。外面全体にススが付着している。口縁端部がいびつ。外面調整は粗いタテハケ、内面調整は口縁部ヨコハケ、頸部ナナメハケ、胴部タテハケ。42は、口径24cmほど。口縁の立ち上がりが大きい。外面にスス付着。外面調整は、口縁部は指押さえとヨコナデ、胴部は細かいナナメハケ。内面調整の口縁部は摩滅、胴部も摩滅が激しいが指押さえと工具痕が残る。43は底部が欠損する中型の甕で、口径18cm、復元高33.2cm。底部はおそらく若干レンズ状になるものと復元する。外面調整は、口縁部幅3.5～4cmの粗いハケ工具によるタテハケ、胴部はタタキと下半部はケズリ。内面調整は、口縁部は細かいヨコハケ、胴部は幅2cmの工具によるナナメ方向のハケ、中位は幅2.5cmのヨコハケ、下半は底部から口縁方向の多方向のハケ調整を行う。44は、口縁部はやや歪むが22.2cm。口縁部は立ち上がりが大きい。外面にスス付着。外面調整は、口縁部指押さえ後ヨコナデ、胴部は粗ナナメ、タテハケ。下半部にかけてハケ目をナデ消している。内面調整は、口縁部指押さえ後細かいヨコハケ、胴部は横方向とナナメ方向の板ナデ。45～49は小型の甕である。45は、ほぼ完形で、口径14.7cm、器高は19～19.4cm、底径5.4cm。外面調整は、口縁部は粗いヨコハケ、胴部上半は粗いナナメハケ、下半はタタキ後板ナデ。板ナデの単位、粘土積み上げの痕跡が残る。内面調整は口縁粗いヨコハケ、胴部は指押さえ後ナナメの粗ハケ。46もほぼ完形。口径15.6cm、器高18.8～19.2cm、底径5.6cm。口縁は立ち上がるが、底部はしっかりとした平底。外面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部上半は底部から口縁方向への細かいタテハケ、底部は指押さえによる調整。ハケ調整を行うときに、粘土によりができている。内面調整は口縁部ヨコハケ後ナデ消し、胴部指押さえ後底部から口縁方向のタテハケ、底部はタテハケをナデ消し、指押さえによる成形である。47は、口縁部がやや外反する頸部の短く胴部が長い壺である。胴部中央部外面にススが付着している。口径13cm、残存高22.5cm。外面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部タテハケ、底部はハケをナデ消している。また、幅3.2cm程の粘土帯の幅につなぎ目が観察できる。内面調整は、口縁部ヨコハケ後ナデ消し、胴部は指押さえ後板ナデ。板状工具の小口痕が残る。48は、胴部中位に最大胴径を持ち、やや凸状の底部を持つ。器壁は最大胴径部分が一番分厚い。残存高16.2cm、底径7cm。外面調整は、頸部ヨコナデ、胴部上半は細かいタテハケ、下半は粗いハケ目後ナデ消しを行う。底部は指押さえ。内面調整は、頸部ヨコハケ、胴部は粗いナナメハケ、底部は指押さえで調整する。49は、口径17cm、残存高11.2cm。外面調整は口縁部ヨコナデ、胴部は細かいタテハケで、横方向に所々ハケによる条痕が残る。内面調整は口縁部指押さえとヨコナデ、胴部は指押さえ後、ヨコハケとタテハケ。50～57は底部である。50は甕の底部で、若干上げ底。底径9.6cm、外面調整タ

テハケ、内面ナデ。51も甕の底部で、若干上げ底。底径はゆがみがあるものの、底径7.2cmを測る。外面調整は指押さえ後タテハケ、ナデ、内面調整は指押さえ後板状工具で縦方向にナデている。52も甕の底部で、トレンチ内の第3層から出土。内面丹塗りで、平底、底径7cm。外面調整は粗いタテハケ、内面調整は指押さえ。53は鉢の底部か。粗雑な造りで器壁が厚い。底部は平底で、底径6cm。底部外面には、線状の圧痕がみられる。外面調整は粗いタテハケ、底部付近は粘土のヨレがある。内面は板ナデと指押さえ痕が残る。54は、小型の壷の底部。器壁が薄く、胎土も細かくきれいな造り。外面調整は、幅広の板状工具による口縁部から底部にかけてのナデ、内面調整は粗いナナメハケ後、ナデ。55は壷の底部。平底で底径6.6cm。内外面の調整は摩滅しており不明。56は甕の底部か。底径4.5cmで平底。外面調整は縦方向の板ナデ。内面調整は板ナデ。

57～61は鉢である。57は大型の鉢で、完形である。3トレンチ内1層から出土。口径22.6cm、器高19.8cm、底径6.5cm。口縁部はくの字に屈曲し胴部はあまり張らず、底部もしまりがない。平底で、底部の厚みが厚い。外面調整は口縁部指押さえ、胴部は幅の狭い細かいタテハケ、底部はナデ消し。内面調整は、口縁部細かいヨコハケ、胴部上位は指押さえ、下半は板状工具による底部から口縁方向のナデ。58は、コーナー部分から出土した小型の鉢である。口径14cm、器高6.3cm、底部は若干平坦部があり、1.5cm。外面調整はタタキ後ナナメ方向のヘラケンマ、ナデ、横方向の板ナデの順に調整を行う。内面調整は指押さえ後ヨコナデを施している。59は、口径13.8cm、外面調整は細かいナナメハケ、内面調整は指押さえ後ヨコナデとヘラナデ。60はミニチュア土器の鉢である。手捏ねで成形されており、口径6.6cm、器高3.5cm。底部は0.7cmほど平坦面が見られる。61は小型の鉢である。口径10.6cm、器高5.8cm、底径4cm。平底。型押しによる成形で、外面にはヒビ状にその痕跡が残る。内面口縁部は、ヨコハケ後ナデ消し、他は指ナデとヘラナデ。

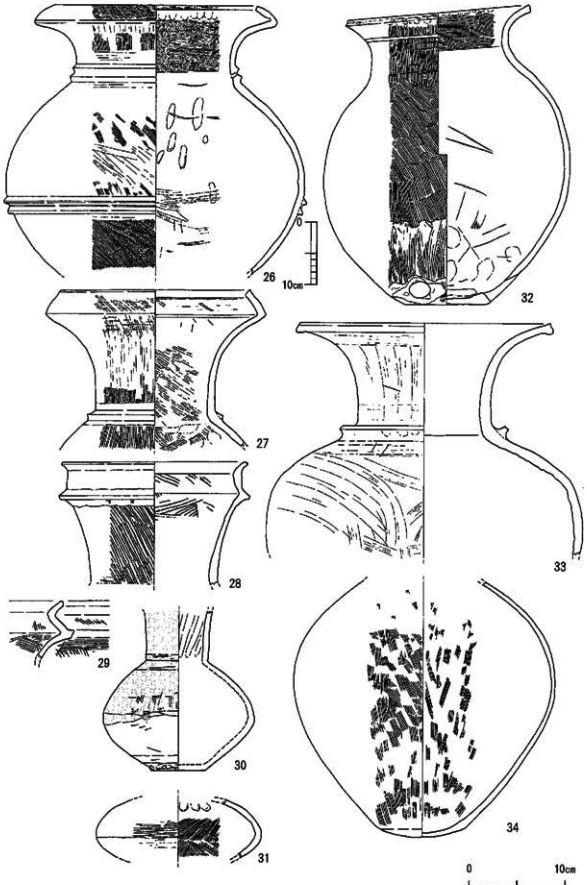
62～65は高杯である。62は杯部で、口径26.8cm。口縁部が立ち上がり、先端部の平坦部がやや外傾する。外面調整は、タテ方向のヘラケンマで、内面調整は暗文風のヘラケンマ、脚部の内面はシボリ痕が残る。63は、脚部で径が19cm。外面調整は縦方向のヘラケンマと裾部はヨコナデ後ナナメハケ。内面調整は、指押さえやヨコハケである。64も脚部で、外面調整は縦方向のミガキ風ナデ、内面はシボリ痕と裾部はケズリ後ナデ。65も脚部で、径16.6cm。外面風化、内面シボリ痕が残る。

66は蓋である。径は26.4cm。外面にハケが残るが、風化が激しい。内面調整は粘土のつなぎ目部分に指押さえ痕が残る。

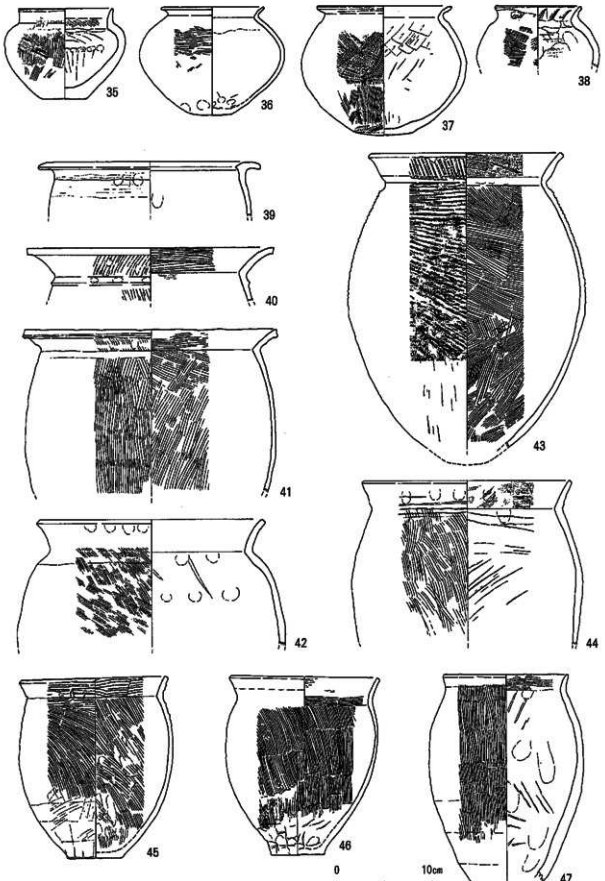
67～71は器台と支脚である。67は器台で、受部径8.0～8.2cm、裾部径12cm、器高14cm。平らな受部に2.2cmから2.5cmの孔が空いているため、支脚のように使用されたり可能性もある。外面調整は、受部径近くは縦方向のケズリで、ケズリの単位で面ができる。胴部はタタキ後浅く薄いハケでナデ消している。内面調整は、上半は指ナデ、下半は細かいナナメハケと指押えで成形する。68は受部径12.9cm。外面調整の頸部はヨコハケ、裾部はタタキ、内面調整の受部はヨコハケ、裾部は縦方向の指ナデ。69は器台の脚部で、裾部径11.8cm。外面調整はタテハケ、内面調整はハケ後ナデ。70は小型の支脚で、受部径4.7cm、裾部径8.5cm、器高10cm前後。厚みは分厚く3cmほどある。外面調整はヘラナデ、内面調整は粗いヘラナデ、内面には粘土のよりが見られる。71は器台の脚部で、径8.9cm。胎土が非常に細かく、器壁も薄い。内外面とも指押さえ痕が残る。

2号溝（図版5、第24図）

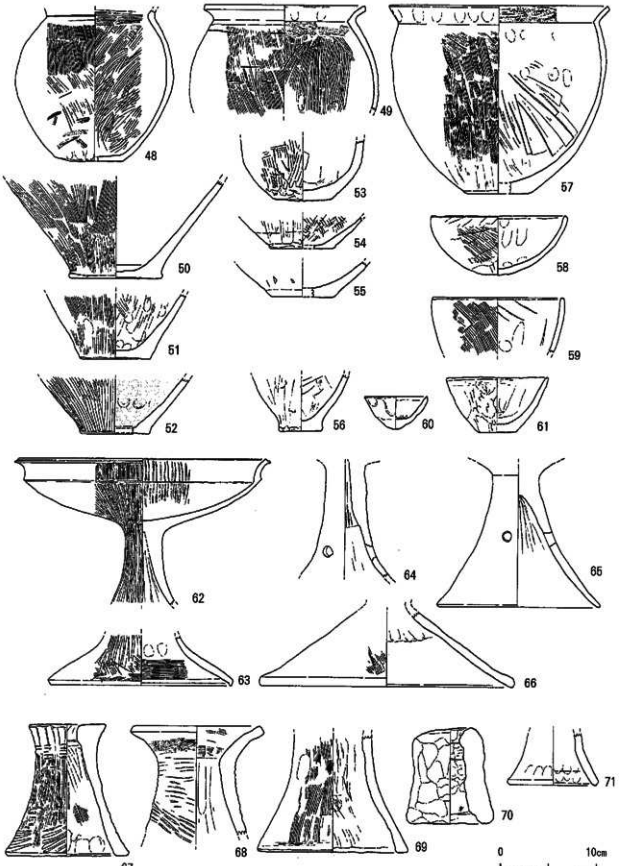
区画溝の東端を切って南北方向に続く、幅約30～100cm、長さ9.7mの溝である。深さは16cmで、



第21図　下西534番地区画溝（南北方向）出土遺物実測図①（1／4、26は1／6）



第22図　下西534番地区画溝（南北方向）出土遺物実測図②（1／4）



第23図　下西534番地区画溝（南北方向）出土遺物実測図③（1／4）

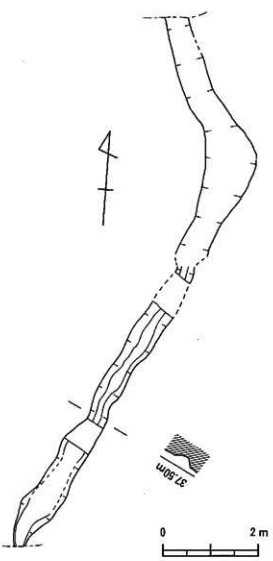
断面逆台形を呈す。埋土は砂利層で、層は分かれない。水路として使用されていたのではないか。出土遺物はすべて破片だが（第25図）、古墳時代前期中頃～後半か。1号住居と同時期に存在したものと考えられる。

出土遺物（図版17、第25図2～5）　2～4は甕で、4は内面調整ケズリである。5は高杯の脚部で、裾部が屈曲して広がる。裾部径12.2cm。

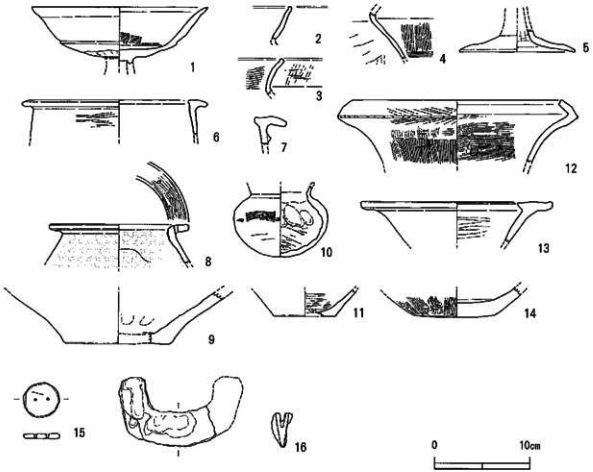
⑤　その他の出土遺物（図版17、第25図）

1は、高杯の杯部で、脚部が欠損しているが杯部は完形である。37号柱穴から出土した。柱穴内祭祀を行ったものか。杯部径13.8cm。外面調整ヨコナデ、内面調整はヨコナデとヨコハケ。6～14は表層からの出土で、6、7は甕の口縁、8～14は壷である。6、7は中期中葉の甕の口縁部で、6は内面ミガキ風の調整を行っている。8は、丹塗りの短頸壷で蓋とセットになるための孔が口縁平坦部に穿たれている。口径11.0cm。9は壷の底部。平底で、底径8.2cm。10は小型丸底壷で、外面調整は胴部上半はヨコハケ、下半は横方向のケズリ。内面は指押さえとケズリによって調整を行う。11も小型の壷の底部で内面に横方向のミガキ痕がみられる。底径4.8cm。12は、複合口縁壷で、区画溝（南北方向）検出時に、直上から出土した。時期的にも区画溝と同時期。口径16.8cmで、複合部屈曲部に刻み目が施されている。口縁部粗ナナメハケ、頸部タテハケ、内面はヨコハケ。13は、広口壷の口縁部で口径15.1cm。外面風化、内面ヨコミガキ。14は大型の壷か甕の底部で、平底ではあるがややエッジが甘くなって丸底化が進む。15は、ボタン状石製品で、直径2.8cm、孔径1.5mm、重さ6.5g。16は、鉄製の鋤先で、掘立柱群の集中する調査区中央部の近世カクランの中から出土している。全長5.5cm、幅7.8cm。時期は不明。

表層からは、弥生時代中期中葉～後葉の遺物が出土している。周辺にこの時期の遺構があるものと考えられる。



第24図　下西534番地2号溝実測図（1／80）



第25図　下西534番地包含層出土遺物実測図（1／4）

(3)　屋敷488番地の調査（平成15年度）

①　調査の概要

屋敷地区の調査は、下西534番地で確認された区画溝の範囲と青銅器工房跡の確認を目的として平成15年度に着手した。調査区は下西534番地から南55mの位置にある488番地とその東隣の489番地の２ヶ所を設定した。488番地では、12m×14mの方形に調査区を設定した結果、弥生時代終末～古墳時代前期にかけての竪穴住居５棟と、不定形土坑1基、溝状遺構、ピット等を検出した。遺構面の深さは現地表から、約50cm下がったレベルにある。目的とした青銅器工房、及び、区画溝に結び付く遺構は検出できなかった。また、遺構の保全を考慮し必要最低限の調査にとどめているため、ピットや土坑の大半は遺構検出のみで掘削は行っていない。

②　竪穴住居

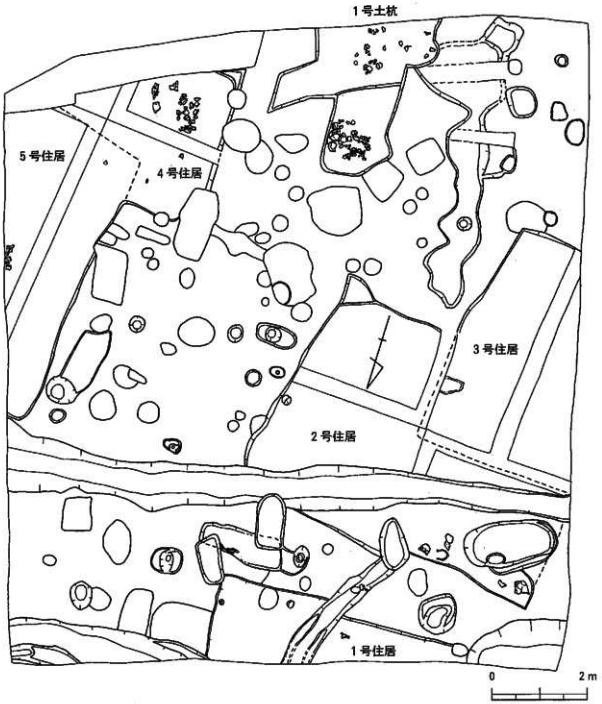
竪穴住居は２棟ずつが切り合って計５棟検出している。全て平面プランは方形である。遺存状態が悪く床面まで10cmほどしか残存していない住居が多い。

１号住居（図版７、第27図）

調査区北側で住居の一部を検出した。住居南側の一辺は5.46mで、床面はほぼ平坦。南壁の床面

付近から、土器が3点出土している。出土した遺物はすべて鉢で、時期は弥生時代終末か。

出土遺物（図版17、第29図１～３）　１は、丸底の鉢で口縁が外反し器壁がやや厚い。口径15.5㎝、器高9.4㎝。口縁部は手捏ねで成形しておりいびつ。外面調整は、口縁部指押さえ、外面上半部は粗いタテハケ、下半部は粗いヨコハケ。内面調整は口縁部粗いヨコハケ、内面は工具を用いて横方向に強くナデ付けているので工具痕が明瞭である。２は、口縁部がやや外反するものの直立に近い形態で、底部はやや平坦面を持つ丸底である。口径13㎝、器高10.4㎝。外面調整は、口縁部。及び、頸部は指押さえで成形。胴部上半はナデ、下半はケズリである。内面調整は、口縁部は指押



第26図　屋敷488番地遺構配置図（1／80）

さえ、胴部はケズリである。3は、手捏ねの小型の鉢で全面に指押えの痕跡がみられる。口径10.6㎝、器高5.4㎝。底部は丸底である。

2号住居（図版7、第27図）

調査区西側で3号住居切られるかたちで検出した。住居は6.72m×4.8mの大きさで、壁は10㎝ほど残存していた。床面は平坦。北西のコーナー付近床面から甕3点が、東側中央の壁付近でも甕の一部が出土している。遺物から時期は古墳時代初頭頃。

出土遺物（図版17、第29図4～6） 4は、立ち上がったくの字口縁に、細長い胴部、ほぼ丸底に近いが若干の平坦部をもつ底部の甕である。口径21.4㎝、器高31.5㎝。外面調整は、口縁部粗いタテハケ、頸部はヨコハケ後ナナメハケ、胴部中位はヘラ状工具による縦方向の擦痕、下半部はケズリに似たヘラ状工具による擦痕がナナメ方向に残る。内面調整は、口縁部粗いヨコハケとナナメハケで、胴部上半はナナメハケ、中位はハケ工具によるナデツケ、下半は粗いナナメハケで、底部は指押さえで調整している。器壁は上半が分厚く下半が薄い。黒斑が胴部中位から下位につく。5は小型の甕で器壁が厚く、粘土のつなぎ目も明瞭ででやや粗雑なつくりの甕である。口縁部は手捏ねで作成した様子がみられ、波打った口縁になっている。口縁はほぼ直立しており、底部は若干の平坦部をもつ。胴下半にはススが付着している。口径13.2㎝～16.5㎝、器高19㎝、底径4㎝。外面調整は、口縁部指押さえと粗いタテハケ、胴部は粗いタテハケが底部から口縁部に向けて施されている。内面調整は、口縁部粗ナナメハケ、胴部は上半粗タテハケ、下半はナナメ、ヨコ、タテハケが施されている。また、肩部には粘土のつなぎ目が見られる。胴中位には粘土の繋ぎ目にヨコハケでナデ付けている。6は、5と同じ小型の甕で作りも似て粗雑なで、粘土のつなぎ目から粘土帯幅は約4㎝である。くの字の口縁端部がやや内傾し、胴中位が張る。底部はやや平坦部をもつ。口縁部は手捏ねで成形されており波打つ。口径18㎝、器高22.4㎝。外面調整は口縁部粗タテハケ、胴部はタタキ後細タテハケ、下半はケズリ後底部から口縁方向のタテハケを施す。内面調整は全てハケ調整で、口縁部ヨコハケ、胴部タテハケ、底部は螺旋状のハケ調整を施す。

3号住居（第27図、図版7）

2号住居に比べ壁が15㎝ほど残存し、残りが良い。東側の一辺の長さは4.86mである。出土遺物がなく時期は不明。

4号住居（図版7、第28図）

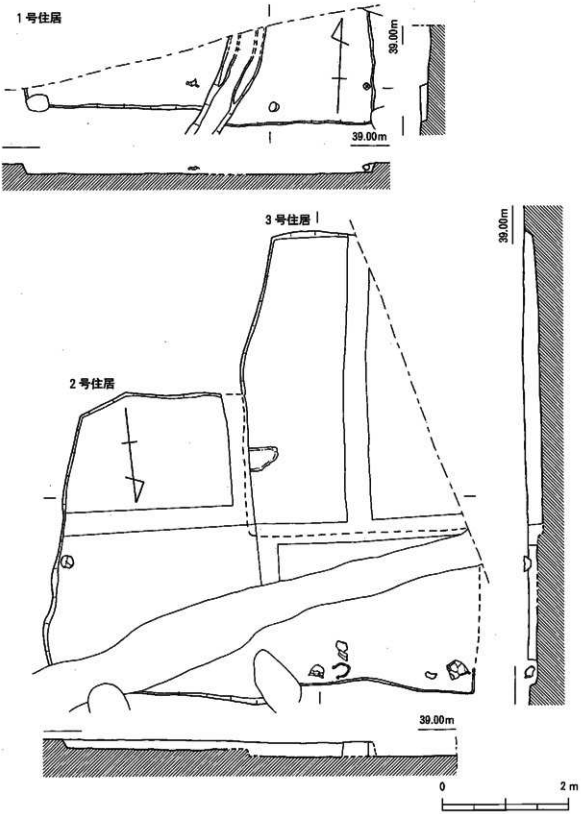
調査区南側から5号住居に切られるかたちで検出した。4号住居はやや残りがよく壁が20㎝残存していた。遺物は西壁近くの床面近くから、若干浮いた状態で出土した。出土遺物は甕2点、ミニチュア土器1点。出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭頃。

出土遺物（図版17、第29図7～9） 7は、立ち上がったくの字口縁の甕で、胴部の張りは少ない。口径19㎝、残存高20.3㎝。外面調整ははとんど風化しているが、一部粗いハケが残る。内面調整も風化が激しいが、下半部は細かいタテハケ。8は、T字口縁の甕で、時期から混入品と考えられる。口径26㎝。外面調整は細かいタテハケ、内面調整はナデ。9は、ミニチュア土器で、手捏ねで成形されている。底径4.2。焼成は悪く、灰褐色を呈す。

5号住居（図版7、第28図）

4号住居を切る。一辺が6.12mの大型の住居である。床面は平坦である。遺物は床面から浮いた状態で丹塗りの壺の頸部（第29図10）が出土しているが、混入品である。住居の時期は不明。

488番地の住居群は、489番地の西側に広がる住居群と一連のものと考えられる。

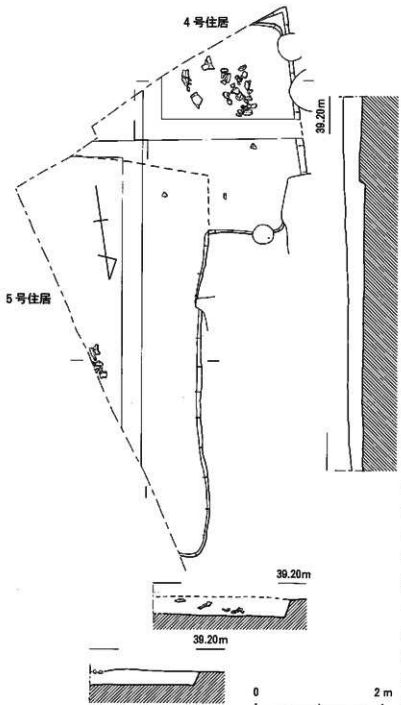


第27図　雁敷488番地1～3号住居実測図（1／60）

③　土坑

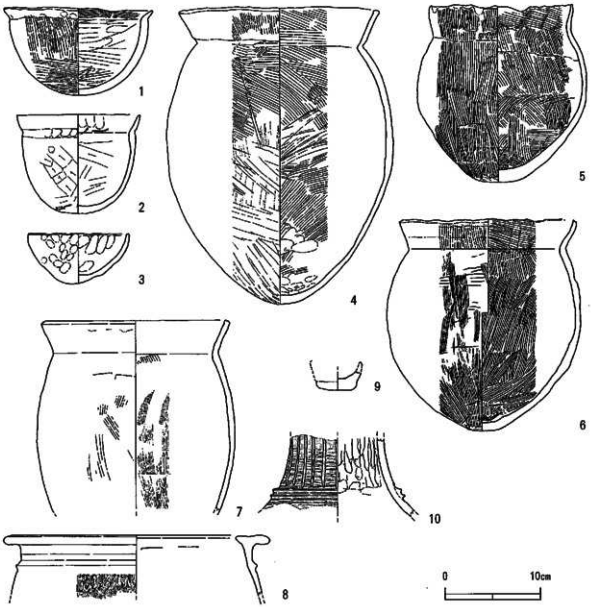
1号土坑（図版7、第30図）

調査区の南西端で検出した不定形の土坑である。底面は平坦で、扁平な形態を呈している。土器が遺構全体から出土し、北側の土器集中区では、焼土も検出している。遺物は床面より若干浮いた地点で出土している。遺構は北側から南側へ一段低くなる。遺構の深さは、北側で10cm、南側で18cmである。出土遺物から遺構の時期は弥生時代後期か。



第28図　屋敷488番地4号、5号住居実測図（1／60）

出土遺物（図版17、第30図1－3）　1は甕、2、3は鉢である。1は、くの字に屈曲する口縁の甕で口径19.4cm、残存高11cm。外面調整は、口縁部はヨコナデ、胴部は細かいタテハケ。内面調整は、口縁部は粗いヨコハケ、胴部はナデ。胎土は1～1.5mmの長石、石英、ウンモを含む。色調は赤褐色で、焼成は良好。2は、大型のボール状の鉢で、器壁が厚く、丸底を呈す。底部は中心からややずれている。口径は26.5cm、器高は12.9cm。外面調整は、上半部粗いナナメハケで、かなり風化が進んでおり観察しにくい。下半部は磨耗が激しく詳細は不明だがナデかケズリか。内面調整は、上半は粗いナナメハケ、下半はヨコハケで、底部一部指抑さえ痕が残る。胎土は1mm位の長石、石英を多く含む。焼成は良好。色調は黄橙色。3は、口縁がくの字に外反し胴中位が膨らむ鉢で、底部は欠損しているが若干の平坦部をもつ形態と考えられる。口径16cm、復元高10.3cm。外面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部上半は細かいタテハケ、下半はヘラケズリ後ナデ。内面調整は口縁部ヨコナ



第29図　屋敷488番地１～５号住居出土遺物実測図（1／4）

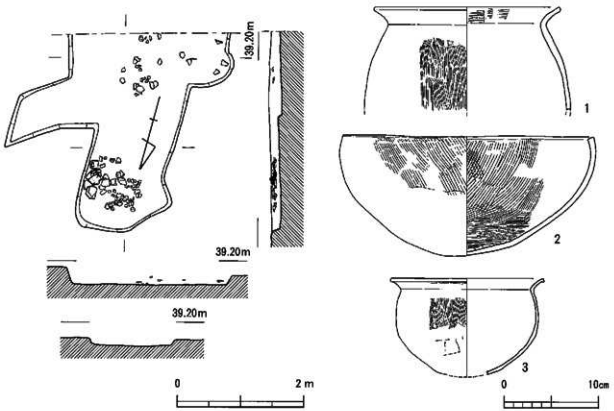
デ、胴部は丁寧なナデで成形している。胎土は１㎜以下の細かい土で、石英、長石、ウンモを含む。色調は淡黄褐色で焼成は良好。

(4)　屋敷489番地の調査（平成15年度）

①　調査の概要

屋敷489番地の調査は、西隣の488番地と同じく、区画溝の延長方向と青銅器工房の確認を目的として平成15年度～16年度にかけて調査を行った。当初は南北、東西にＬ字のトレンチを設定していたが、住居の中からメノウ製の勾玉や土製人形等が出土したことから、調査途中で住居群が広がる南側へ調査区の一部を拡張した。遺構検出面は現況から20～30㎝下の標高38.4～38.7ｍである。

調査地点の地形は、南側から派生する扇状地上に位置しており、西側は瑞梅寺川へ向かってゆる



第30図　屋敷488番地１号土坑実測図及び出土遺物実測図（1／60、1／4）

やかに標高が下がっている。今回の調査区は微高地の尾根部分にあたると考えられる。検出遺構は竪穴住居14棟、掘立柱建物１棟、溝状遺構２条、ピットである。

遺構の保全を考慮して、西側の住居群の一部、ピット等に関しては遺構検出のみで掘削を行っていない。溝遺構に関しては区画溝との関連もあり時期を特定するため掘削を行った。

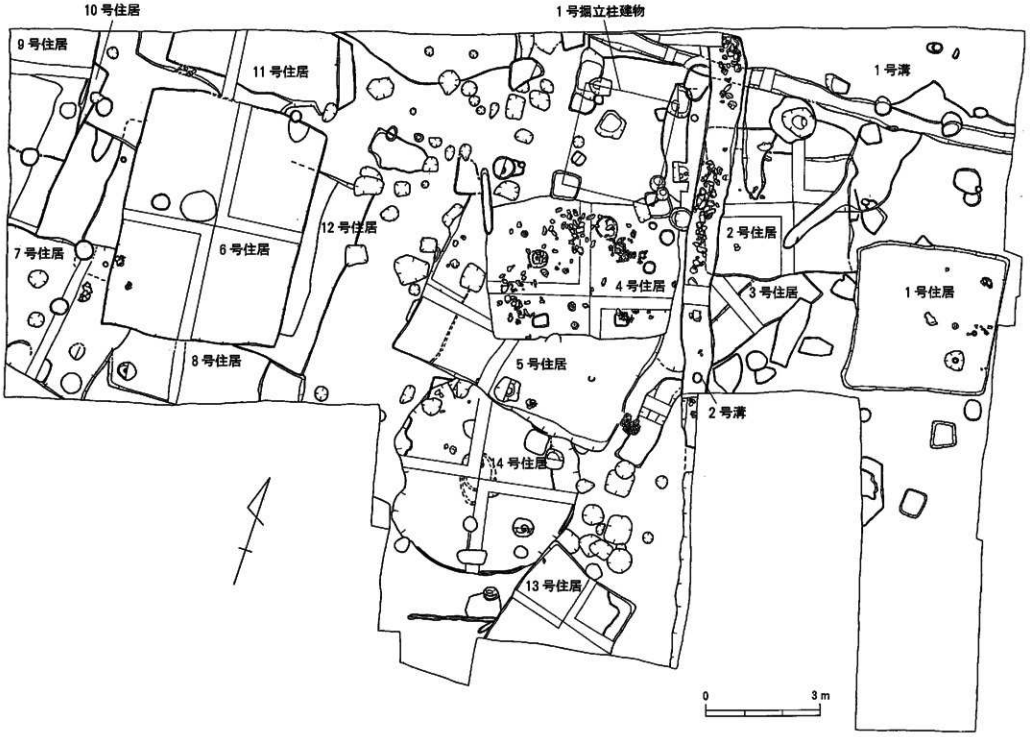
②　竪穴住居

竪穴住居は、調査区から14棟検出している。時期は弥生時代中期～古墳時代中期である。住居の時期は東側から西側に向かって時期が古くなっていく傾向がみられる。全ての住居が切り合っており、住居が密集していた様相を示している。現場での住居番号は、報告の際13号→14号、14号→13号に変更している。

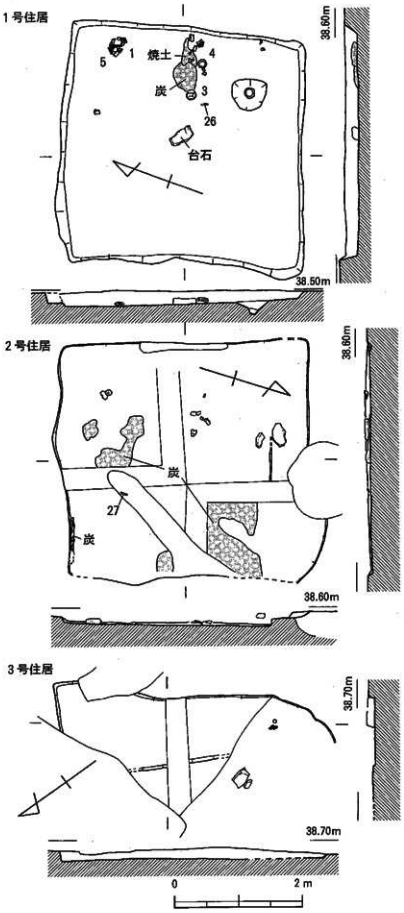
１号住居（図版８－ｂ、第32図）

１号住居は調査区東隅から検出した。3.9m×3.96mのほぼ正方形のプランで、壁は20～25cmで残りが良い。柱穴は１ヶ所のみ検出。東壁中央付近に焼土とスミが集中し、その周囲から椀、須恵器杯、鉄刀子などが出土している。竈が設けられていたと考えられる。竈正面の中央床面には台石が据えられていた。時期は出土遺物から５世紀と捉えうる。

出土遺物（図版８、第37図）　１は、住居北東部から出土した甕で、口径17.1cm。外面胴部粗いヨコハケ、内面ヘラケズリ。２、３は椀である。２は口径13.1cm、器高6.9cm。調整は内外面ともケズリ。３は口径14.5cm、器高5.5cm。外面ケズリ、内面ナデ。４は、須恵器の杯蓋で、口径14.2cm、器高4.5cm。外面回転ヨコナデと回転カキ目、内面は同転ヨコナデ。５は鉢で、口径10.9cm、器高８cm。外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケ。底部は指押さえ。26は、鉄刀子で、全長



第31図　屋敷489番地遺構配置図（1／100）



第32図　屋敷489番地1～3号住居実測図（1／60）

11.4cm、幅2.4cm。

2号住居（図版8、第32図）

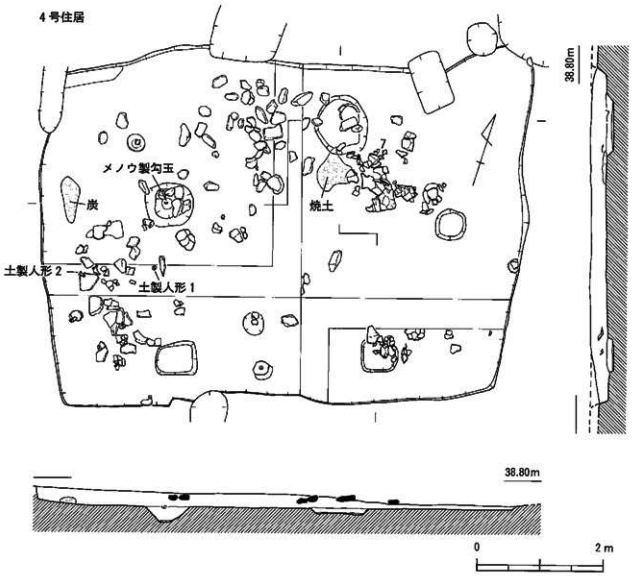
2号住居は3.66m×3.9mの方形の住居で、北側にピット状遺構がある。焼土やスミが床面各地から検出し南側壁面では、スミの塊が出土。遺物は27の砥石が出土。長さ12.8cm、幅2.7cm、粘板岩製。

3号住居（図版8、第32図）

3号住居は、5号、2号住居に切られる。ピット状遺構のような段差が床面で確認された。出土遺物がなく、時期は不明。

4号住居（図版9～10、第33図）

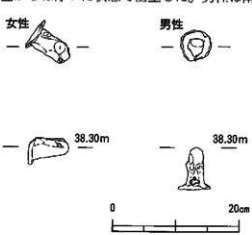
4号住居は7.74m×5.7mの長方形の平面プランで、柱穴は5ヶ所検出している。埋土には礫や土器が混在しており、床面直上や上層などレベルが一定していない。住居廃棄時に投げ込まれたような様相を示している。土器の時期は全て同時期の一括資料で、時期は古墳時代前期中頃～後葉。主な出土遺物として住居東側の土層観察畦内から、男女一対の土製人形、北西部の柱穴上層から大型のメノウ製勾玉1点、ミニチュア土器4点等の祭祀的要素の強い遺物が出土して



第33図　屋敷489番地4号住居実測図（1／60）

いる。

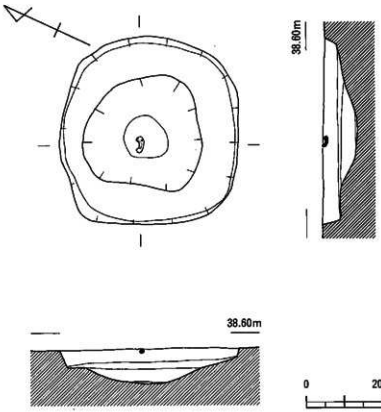
土製人形は、住居南西部の埋土中から出土しており床面からは浮いた状態で出土した。男性は南を向いて直立した状態で、女性は頭部を南東に向け横たわった状態で出土した。男性はまっすぐ立っており、意図的に据えられた感がある。男女の人形は1.2m離れており、女性の土製人形のレベルが若干高かった。メノウ製の勾玉は、柱穴の最上層、床面とほぼ同じレベルから鈎部を西に向けた状況で出土。柱穴の中央から出土しており柱を据える際の祭祀とは考えにくい。住居を廃棄する際の柱の抜き取りに際する祭祀行為として埋納したのではないか。この他に、出土遺物の中にはミニチュア土器が4点含まれている（第37図）。土製人形、メノウ製勾玉、ミニチュア土器等



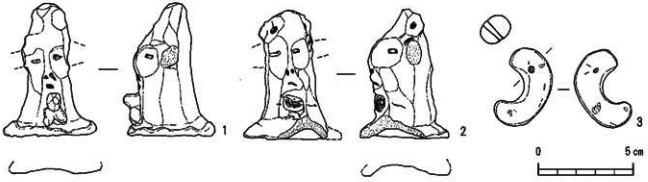
第34図　屋敷489番地4号住居
土製人形出土状況実測図（1／6）

祭祀に関わる遺物がまとまって出土している点が特筆される。

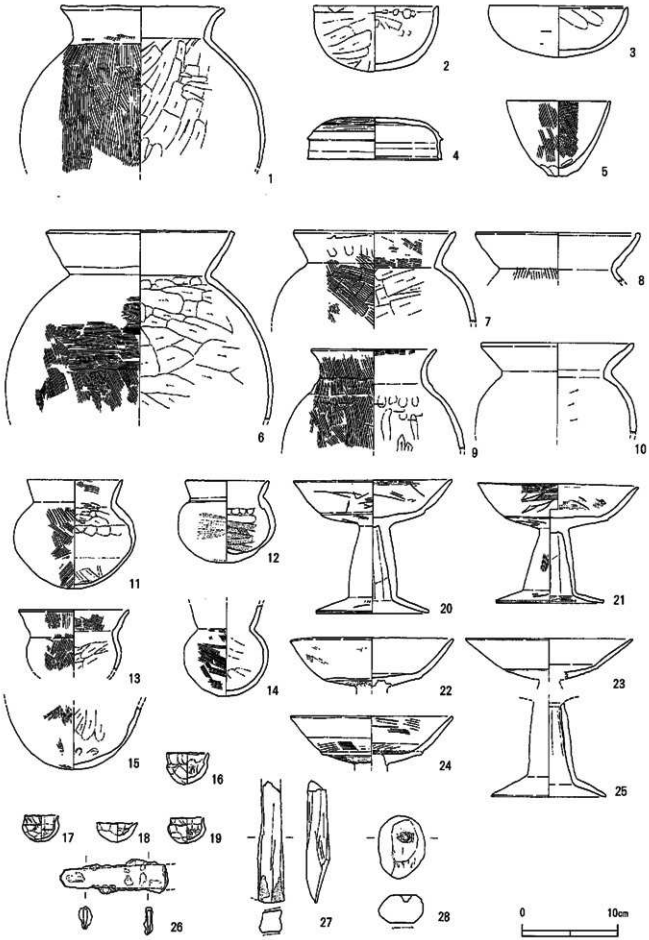
出土遺物（図版17・18・19、第36・37図）　第36図の1は土製人形の男性である。全長7.1cm、底部4.9cm。目、鼻、口、は棒状の工具で刺突し、性器は貼付で表現している。鼻はつまみあげて隆起する。両手が日の横に付いていたが剥離している。頭は長く一部日の上で窪みがつく。頭部そのものを男根を模して成形されたか、髪形を表現したものだろう。2は女性で、全長6.9cm、底部4.5cm。目、鼻、口のつくりは男性と同様で、性器はやや丸みをおびた工具で深さは8mmほど窪ませている。頭部は両サイド摘み出しその中央に棒状工具による刺突がある。髪形を表現したものと考えられる。両手は剥離している。3はメノウ製勾玉である。全長4.2cm、孔径0.15～0.3cm、最大幅1.5cm、最大厚1.3cm。透き通った濃い赤で、一部火を受けたためか黒く変色している。第37図の6～26が4号住居出土土器である。6～10は甕である。6は口径19.7cm。外面肩部はヨコハケ、他タテハケ、内面ケズリ。7は口径16.8cm。外面調整は口縁部指押え後ヨコナデ、胴部はナナメハケ、内面は口縁部ヨコハケ、胴部ケズリ。8は口径17cm、内外面調整は口縁部ヨコナデ。9は、緩やかに外反する口縁をもち、やや粗雑なつくりの甕で、口径13cm。外面調整はタテハ



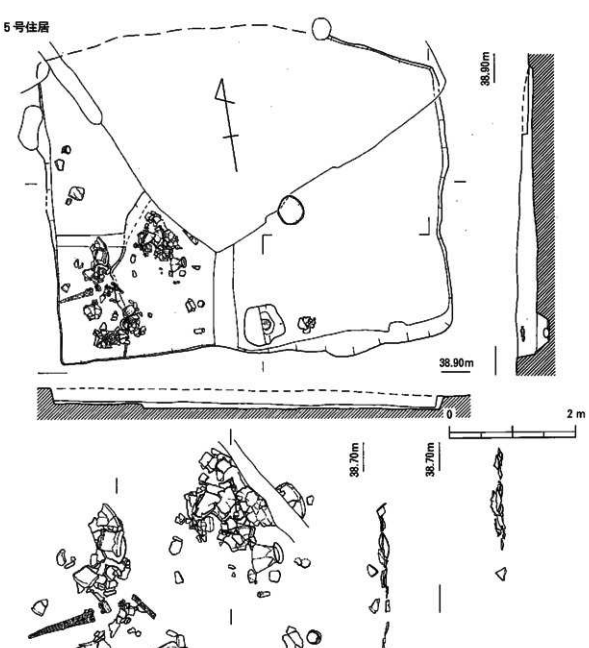
第35図　屋敷489番地4号住居柱穴内メノウ製勾玉出土状況実測図（1／10）



第36図　屋敷489番地4号住居土製人形、メノウ製勾玉実測図（1／2）

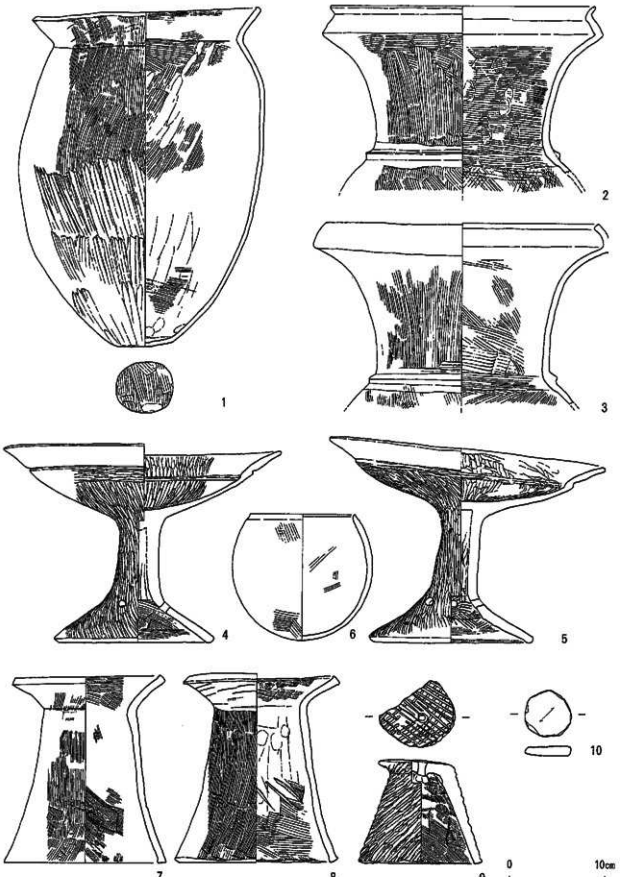


第37図　屋敷489番地１～４号住居出土遺物実測図（1／4）



第38図　屋敷489番地５号住居実測図（1／60、1／30）

ケ。内面調整は口縁部ヨコハケとナデ、胴部は指押さえ後ナデ。10は、口径15.4cm。器壁が厚く焼成があまい。外面調整は風化、内面調整はケズリ。11～14は小型丸底壺である。11は、口径10cm、器高11.6cm。外面調整はナナメ方向のハケ、内面は口縁部ヨコハケ、胴部指押さえとケズリ。12は、口径8.6cm、器高9.8cm。外面調整は口縁部ヨコナデ、胴部板ナデ。内面は口縁部ヨコナデ、胴



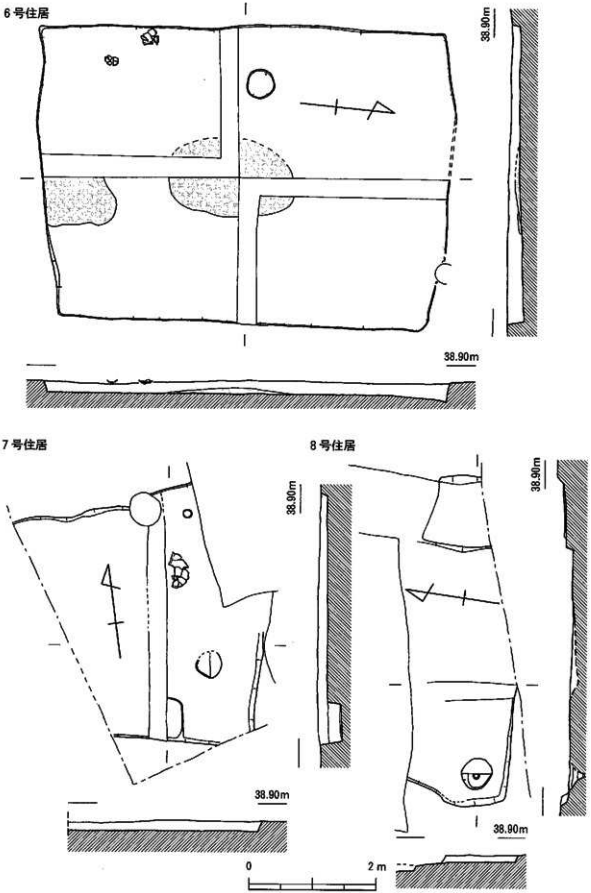
第39図　屋敷489番地５号住居出土遺物実測図（1／4）

部指押さえとケズリ。13は口径11.4cm。口縁部は二重口縁のなごりか小さな段がつく。外面調整は粗ハケ、内面調整は口縁部ナナメハケ、胴部ケズリ。14は口縁部が欠損。推定器高10cm。外面調整は不定形の細いハケ。内面調整は胴部ケズリと指押さえ。15は甕か鉢の底部で、丸底。外面ハケ、内面ケズリと指押さえ。16～19はミニチュア土器で、全て手捏ね成形で18以外は完形。16は口径4.5～4.7cm、器高3.4cm、尖り底。外面調整は、口縁部板状工具で押えつつつまみ上げ、体部はヘラ状工具でナデ。内面はナデ。17は口径3.5～3.7cm、器高2.8cm、底径0.8cm。外面口縁部は板状工具で押さえが入る。体部は板ナデ。内面はナデ。18は高さが低く、口縁は正円ではなく片口の容器のように出っ張りがある。他の3点と形、造りとも違う。内外面とも指押さえで成形。口径3.7～4.2cm、器高2cm、尖り底。19は口径3.5～3.6cm、器高2.7cm。口縁部は摘み上げて成形。外面調整はナデ、内面はナデ。20～26は高杯である。4号住居からの高杯の出土は図化できなかった個体も含めると多い。20はほぼ完形。受部径16.8cm、脚部径11.7cm、器高14.1～14.3cm。脚柱部はエンタシス形。外面調整は杯部ミガキ後ナデ消し、脚部はナデ。内面調整は杯部ハケ後ナデ、脚部はケズリとナデ。21は受部径16.9cm、脚部径11.2cm、器高12.7cm。外面調整は杯部ハケとナデ、脚部ナデ。内面調整はナデ、脚部ケズリとナデ。22は受部径17.2cmで、外面ハケ、内面ヨコナデ。23はやや杯部が広がり高さがない。受部径17.5cm。調整は内外面ともナデ。24は、口径17.2cm。外面調整ヨコナデと下半部はハケ目後ナデ。内面は螺旋状のハケ目後ナデ。25は脚部で、脚径12cm。調整は内外面とも風化。26は受部と脚部の一部で外面調整はミガキ風で平滑。内面はシボリ痕が残る。28はタタキ石で、結晶片岩石製。全長6.6cm、幅4.8cm。

5号住居（図版9－b、10－f、11－a、第38図）

5号住居は4号住居に3分の1ほど切られる形で検出した。6.18m×4.26mの長方形のプランを呈する。柱穴は中央南壁で1ヶ所検出した。床面は平坦で西側がベッド状遺構のように一段高くなっている。住居の壁は残りの良いところで30cmほど残存していた。出土遺物は住居の南西隅の床面直上から集中して出土しており、器種は甕、壺、高杯、鉢、器台、支脚等器種が揃う。住居使用時の出土状況ではなく、4号住居と同様に住居廃棄時の祭祀行為として意図的に投げ込まれた可能性がある。また、住居中央床面に赤色顔料が薄く堆積しており、その後福岡市埋蔵文化財センターで分析した結果ベンガラであることが分かった。祭祀行為の一環で赤色顔料を撒いた可能性も考えられる。住居の時期は出土遺物から弥生時代終末期である。

出土遺物（図版18、第39図）　全て床面からの出土である。1は、長胴形の中型の甕で、口径23.9cm、器高36cm、底径5.4～5.9cm。口縁はくの字に立ち上がり、胴部最大径は中位～下位に位置する。下半部のしまりがなく凸レンズ状の底部へと続く。胴部中位にススが付着する。外面調整は口縁部タタキ後粗いタテハケ、胴部上半は縦、斜め方向の粗いハケ目、下半部は板状工具によるナデ。内面調整の口縁部はヨコハケ後ヨコナデ、胴部上位は斜め方向のハケ後指ナデ。下半部はヨコハケ後板状工具によるナデ。底部は指押さえで成形する。内面の中位に煮炊きによるスス痕が残る。2、3は複合口縁壺である。2は、口縁端部が外反し、頸部にかけて内側にややしまる。口径27.8cm。外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部はヨコハケ後タテハケ。内面調整は頸部指押さえ後ヨコハケ、頸部は縦、斜め方向のハケ。3は、頸部のしまりが少ない。法量はほぼ2と同様である。口径28.4cm。外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ。内面調整は頸部ヨコナデ、頸部ナナメハケ。胎土は2mm大の砂粒を含み粗い。4、5は高杯である。4は、杯部径29cm、器高20.9cm、脚部



第40図　屋敷489番地６～８号住居実測図（1／60）

径17.6cm。脚部には3ヶ所穿孔が施されている。外面調整は、受部は横方向と縦方向のヘラミガキ、脚部は縦方向のヘラミガキで左回りの螺旋状に磨かれている。内面調整の受部は縦方向のヘラミガキ、脚部はシボリ痕と横方向のハケ調整である。器壁が厚く繊細さに欠ける。5は、受部と脚部がかなり歪んだ形状を呈している。脚部の穿孔は3ヶ所である。杯部径29.0cm、器高21.4cm、脚部径17.2cm。外面、内面の調整のミガキはやや雑で、外面調整はヨコミガキとタテミガキ。内面調整の受部は基本的には縦方向で、やや斜め方向のミガキが混ざる。脚部はシボリ、粗いハケ調整である。6は球形の鉢で、口径11.0cm、器高13.4cm。内外面ともに調整は風化して詳細は不明だが粗いハケ目が残る。7、8は器台で、7は受部径15cm、器高19.6cm、脚部径17.1cm。外面調整は粗いタテハケで、内面調整はヨコハケとタテハケ。器壁は厚く胎土も粗い。8は、受部径15.2cmで、器高19.9cm、脚部径18.0cm。外面調整はタテハケで受部はハケ工具痕が残る。内面調整の受部は指押さえ後ヨコハケ、脚部は板ナデと粗いヨコハケ。中位に工具による沈線が残る。9は沓形の支脚で、器高11.1cm、脚部径7.9cm。外面調整は全体にタタキ痕が螺旋状に巡る。内面調整はナナメ、ヨコ方向のハケ調整が残る。

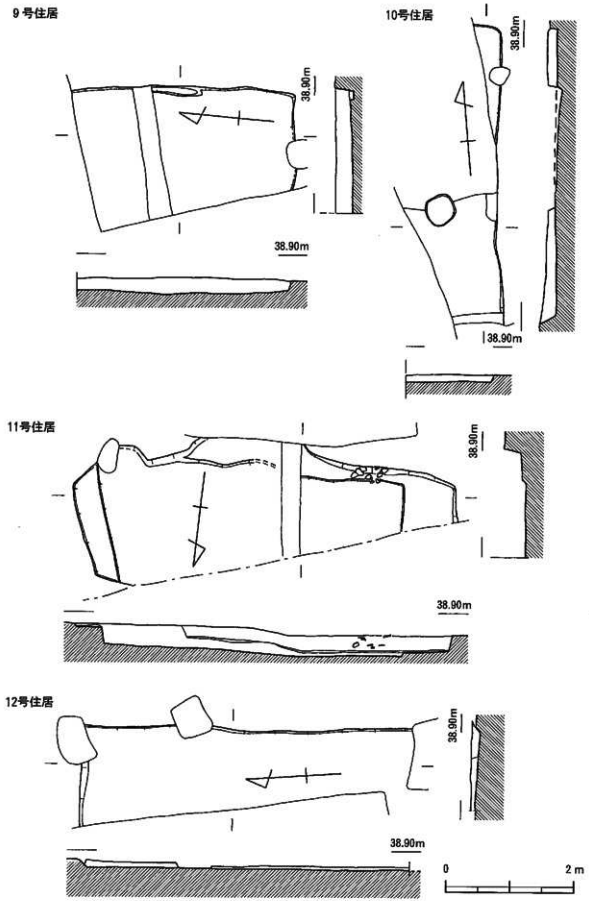
6号住居（第40図）

6号住居は調査区西側に集中する住居群（6～12号住居）の中で、一番上層で検出した竪穴住居である。規模も一番大きく、6.36×4.68mを測る。壁は残りのよいところで30cmほどあり、住居中央に焼土と炭が厚く堆積しており中央部に炉があったものと考えられる。また、南壁周辺には炭が薄く堆積していた。出土遺物は、西壁埋土中から小型の甕と鉢が、中央ベルト内の北側床面から碧玉製の管玉1点とガラス管玉1点、埋土中より石製紡錘車1点が出土した。また住居南東床面から鉄製鋤先が出土したが、実測する前に大雨により原位置が動いてしまい図化できなかった。出土遺物から遺構の時期は、弥生時代終末期～古墳時代初頭である。

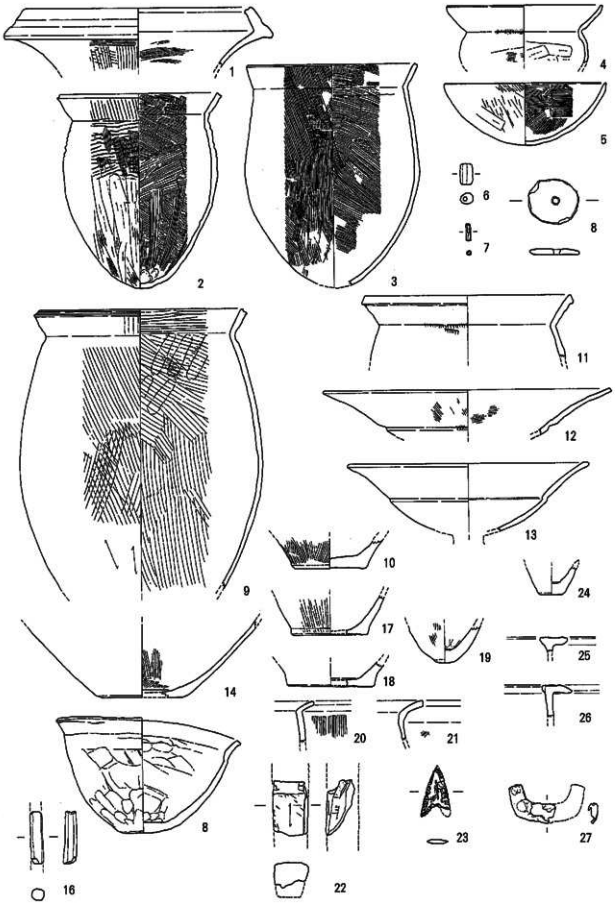
出土遺物（図版18・19、第42図）　1～8、27が6号住居からの出土遺物である。1は、複合口縁壺の口縁で、口径23.6cm。外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部粗いタテハケ。内面調整は口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ。2～3は小型の甕で、ともに立ち上がったくの字口縁と、丸底に近い底部をもつ。2は口径15.9cm、器高20.6cmで、10円玉程度の底部を残す。外面調整は口縁部粗いタテハケ、胴部はタタキ後細かいタテハケで、下半部は板状工具によるケズリ。内面調整は口縁部ヨコハケ、胴部ナナメハケ、底部に向かって放射状にタテハケが施されている。3は、口径17.4cm、器高24cmほどで底部は凸レンズ底である。外面調整は口縁部タテハケ、胴部はタテ、ナナメハケ。内面調整は口縁部ヨコハケ、胴部はナナメハケである。4、5は鉢で、4は口縁がくの字に立ち上がる薄手の鉢で、口径16.1cm。外面調整は風化が激しいが口縁部ヨコナデ、体部は細かいヨコハケ。内面調整は口縁部ヨコナデ、体部は指押さえ後ヨコハケ。5は口径17.0cm、器高6.6cmで内外面とも粗いハケ調整である。6、7は管玉で、6はガラス製で表面は白く風化している。ガラスは、福岡市埋蔵文化財センターで分析したところ鉛バリウムガラスであった。長さ2.1cm、幅1.3cm。7は碧玉製の管玉で両側穿孔。長さ1.8cm、直径0.5cm。色調は深緑色。8は石製の紡錘車で、直径4.7～5.1cm、重さ12.0g、孔径0.6cm。27は住居の床面出土の鉄製鋤先で残長4.2cm、刃部の幅5.0cm。

7号住居（第40図）

調査区南西端で検出した住居で、住居の南西端と北東端をそれぞれ調査区外と6号住居に切られている。壁は15cmほどしか残存していない。出土遺物は床面から甕が、埋土内から甕、高杯が出土



第41図　屋敷489番地９～12号住居実測図（1／60）

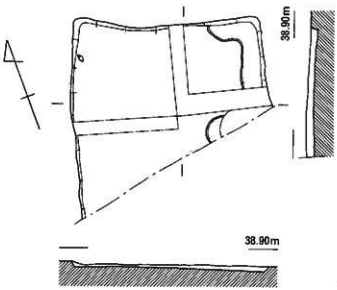


第42図　屋敷489番地６～10号住居出土遺物実測図（1／4）

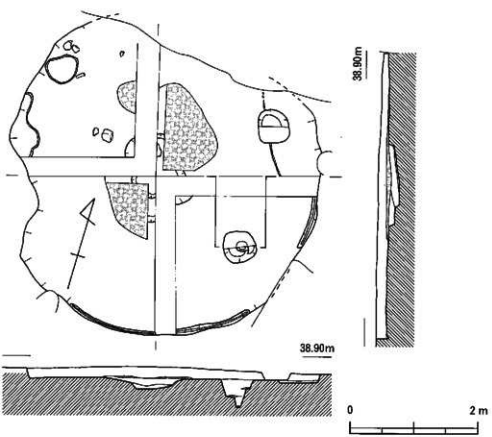
している。出土遺物から時期は弥生時代終末か。

出土遺物（図版19、第42図）　9～13が7号住居からの出土遺物である。床面直上は9の甕のみである。9～11は甕である。9はくの字口縁をもつ中型の甕で、長胴化した胴部をもつ。外面調整は口縁部ヨコハケ、胴部は粗い多方向のハケ調整。内面調整は口縁部ヨコハケ、胴部は多方向のハケ目がみられる。10は後期初頭頃の甕の底部で住居の時期より古い。11は甕の口縁で口径20.6cm。

13号住居



14号住居



第43図　屋敷489番地13、14号住居実測図（1／60）

内外面ともに調整が風化しており詳細は不明。時期は9と同時期か。12、13は高杯で、12は受部が大きく開き、径は30.3cmを測る。調整は内外面とも風化しているが所々に細かいハケ目が観察される。13は受部が12より立ち上がり、径は25.0cmを測る。これも内外面とも風化が激しく調整は不明。

8号住居（第40図）

調査区南西部で検出し、住居の大半を7、6、12号住居に切られる。住居は方形を呈しており、東側はベット状遺構があり床面が一段高くなる。柱穴は住居南西部に1カ所検出した。遺物はすべて埋土からの出土で時期は確定できない。

出土遺物（第42図） 14は壷の底部で底径8.5cm。15は鉢で口径19.4cm、器高12.5cm、底径3.3cm。歪みがあり、調整も雑である。ともに時期は後期前半ごろか。

9号住居（第41図）

調査区西北端で検出した住居で、10号住居を切る。出土遺物は取っ手状土製品1点で、住居の時期は不明である。

出土遺物（第42図） 16は土製の取っ手の一部と思われる。断面形状は円形、胎土は細かい。長さ5.4cm、直径1.3cm。

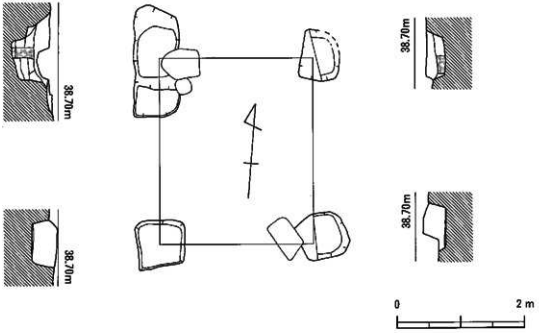
10号住居（第41図）

9、7号住居に切られ、出土遺物はなく時期も不明。

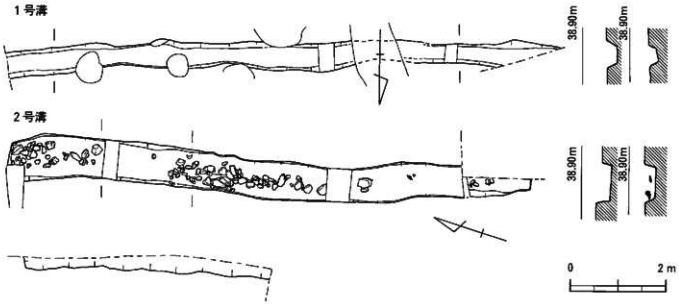
11号住居（第41図）

調査区北西部で検出。やや不定形でいびつな形状をしており、一段南側壁面が高くなる。東西幅5.65m。出土遺物は全て埋土中からで時期は不明。

出土遺物（第42図） 17～23までが11号住居出土遺物である。17、18は弥生時代中期の甕の底部でそれぞれ底径7.8cmと8.7cm。19はミニチュア土器の底部で2.0cmの底部をもつ。手捏ねによる成形



第44図　屋敷489番地1号掘立柱建物実測図（1／60）



第45図　屋敷489番地１号、２号溝実測図（1／80）

で一部ハケ目がみられる。20、21は甕の口縁で外面にタテハケが施される。22は頁岩製の仕上げ砥石で３面砥面が残る。23は黒曜石製の打製石鏃で長さ5.3cm、幅3.2cmである。

12号住居（第41図）

６、８号住居に切られ住居の東側一部しか残存していない。出土遺物はミニチュア土器が１点で、詳細な時期は不明。

出土遺物（第42図）　24は平底のミニチュア土器で底径2.4cm。手づくねによる成形。時期は弥生時代後期か。

13号住居（図版11－ｂ、第43図）

南側拡張区から検出した、東西方向一辺2.9mの方形の小型の住居である。床面近くで炭を検出。出土遺物はなく時期は不明。

14号住居（図版11－ａ、第43図）

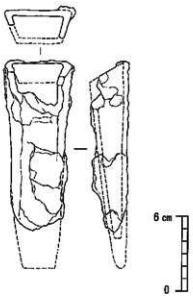
南側拡張区から検出し、５号住居に北側を切られる直径4.3mの円形住居である。壁面に沿って周溝が廻る。中央に堆土に焼土や炭が混ざる土坑があり炉跡と考えられる。出土遺物は破片だが、中央の土坑から弥生時代中期の甕の口縁が出土している。

出土遺物（第42図）　25、26はそれぞれ弥生時代中期中葉頃の甕の口縁で、いずれも破片である。

③　掘立柱建物

１号掘立柱建物（図版８－ｃ、第44図）

調査区中央で検出した１間×１間の大型の掘立柱建物である。柱穴の大きさは80cm四方で、抜き取り痕のある北西の柱穴は1.8×0.7mであった。柱痕は直径15～27cm、柱間は2.4mと2.9mである。建物は調査区の北側へさらに伸びていく可能性がある。



第46図　屋敷489番地13号柱穴出土
梯形鉄斧実測図（1／3）

④ 溝

掘削を行った2条について報告を行う。

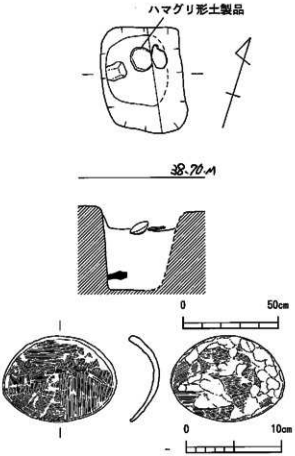
1号溝は調査区の北東部分に東西方向にほぼ平行に走っている。2号溝は1号溝を切り、南北方向に伸びている。2号溝は遺物が無く時期は不明だが、1号溝は出土した須恵器小片から5世紀代か。実測可能な遺物はなかった。

1号溝（第45図）

幅40～60cm、深さ25cmの断面逆台形を呈する溝で、西から東側に向かって深くなる。埋土は砂層であったことから排水溝のような役割を持っていたと考えられる。この溝は488番地でも検出されており一連のものと想定される。

2号溝（第45図）

幅80～100cm、深さ20～30cmの断面皿状を呈する溝で、標高に沿って南から北に向かって深くなる。埋土には上層から下層まで角礫が詰まっているが、出土遺物はない。



第47図　ハマグリ形土製品出土状況及び遺物実測図（1／20、1／4）

⑤ その他の遺構・遺物

調査区内の2ヶ所の柱穴から、鋳造梯形鉄斧と、ハマグリ形の土製品がそれぞれ出土している。

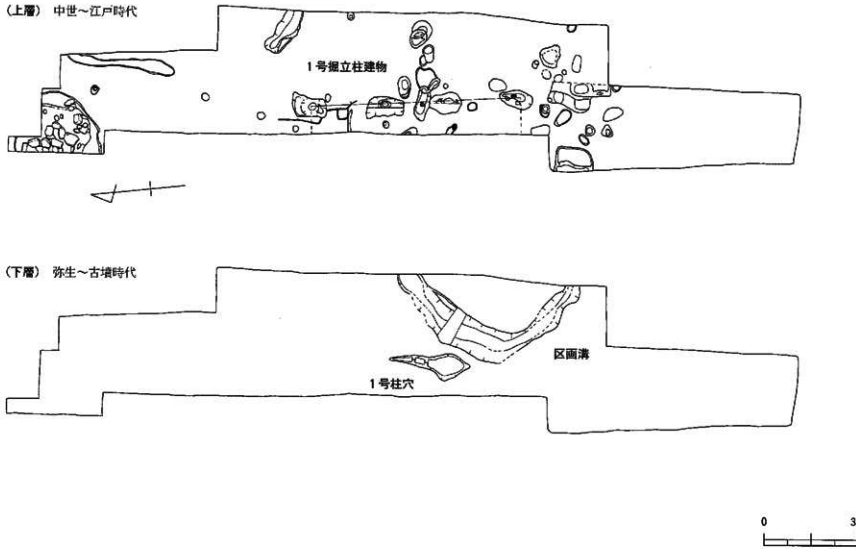
梯形鉄斧（図版19、第46図）

1号溝を切り、2号溝に切られる13号柱穴から出土。梯形鉄斧は、柱穴の南壁付近の埋土中から出土した。調査中に誤って取り上げてしまい、出土状況の記録が取れなかった。鉄斧は、先端とソケット部が欠損しており、ソケット部は台形を呈している。残存長13.3cm、幅5.6cm。梯形鉄斧は朝鮮半島で主に出土し、国内では6世紀代の古墳の副葬品などに見られるが出土数は少ない。今回のように柱穴からの出土は稀である。共伴遺物は小片の土師器のみで、時期の特定は難しいが5世紀代の1号溝を切っていることから6世紀代か。

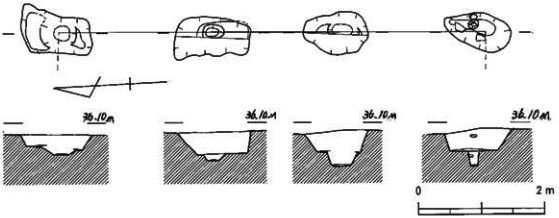
ハマグリ形土製品（図版11－c、第47図）

1号掘立柱の布掘り状遺構を切る柱穴から出土した。南北方向56cm、東西方向43cm、深さ44cmの隅丸長方形を呈している。ハマグリ形土製品は柱穴のプランを確認し一段下げた時点で検出し、貝の内側を上向きに、やや西側に傾いた状態で出土した。地鎮の意味で埋納した可能性が考えられる。遺構の時期は、4世紀代の住居を切る掘立柱建物を切ること、ハマグリ形土製品の調整、胎土から古墳時代の範疇で捉えられよう。

ハマグリ形土製品は完形で、短径9.1cm、長径11.9cm、高さ3.3cm、厚さ9.7cm。内面はハケによる調整で、外面は指押さえとハケによる調整を行う。胎土は2mm大の長石、石英、雲母を含み粗い。



第48図　下西528番地遺構配置図（1／120）



第49図　下西528番地１号掘立柱建物実測図（1／60）

(5)　下西528・535番地の調査（平成16年度）

①　調査の概要

下西528・535番地の調査は、平成14年度で確認された区画溝の北西隅のコーナーを明らかにする目的で平成16年度に調査を行った。初め528番地で南北東西にＬ字にトレンチを入れたところ東西方向は西側に流れる瑞梅寺の氾濫域で遺構が検出されなかった。南北方向のトレンチからは、弥生時代～古墳時代、中世から江戸時代の遺構が確認された。

528番地は534番地に比べ、現況で比高差が1.2mあったことから、区画溝が削平されている可能性が考えられたが、調査の結果、平成14年度に確認された区画溝の延長にあたる北西部コーナーを確認し、その他、古墳時代の柱穴１ヶ所、江戸時代の掘立柱建物１棟を検出した。またさらに区画溝の延長を追い、南側に535番地にトレンチを２ヶ所設定したところ、江戸時代の掘削の下から区画溝の下層部分を確認した。

以下、調査区ごとに説明を行う。

②　528番地

調査区は、幅１ｍで南北に12.5m、東西に４ｍのトレンチを設定し、遺構の検出があった南北方向のトレンチでは遺構の検出状況を見て東と西へ調査区を拡張している。

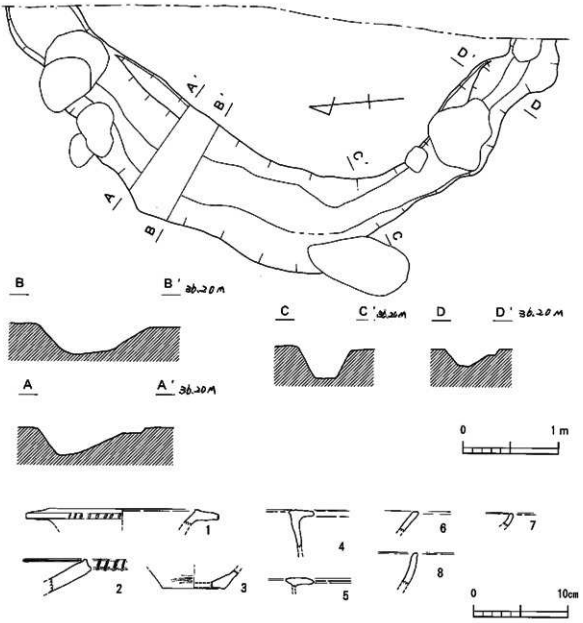
掘立柱建物

調査区中央に１棟検出した。柱穴は３間のみで、建物はさらに調査区外の西側へ広がるものと考えられる。

１号掘立柱建物（図版12、第49図）

柱穴はそれぞれ南北に細長い形状を呈しており、すべて２段掘りを呈している。それぞれの柱間の長さは北から、2.4m、2.0m、2.1mである。

出土遺物は小片で実測可能な遺物はなかったが、近世陶磁器の破片から江戸時代の建物と考えられる。

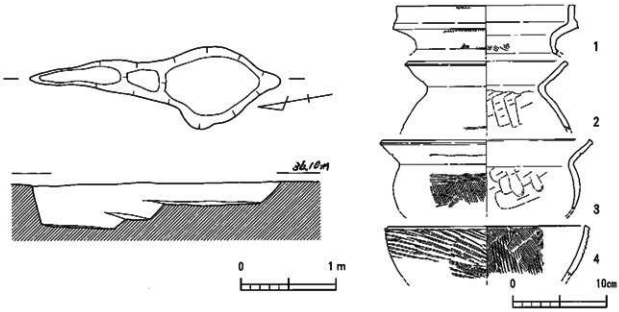


第50図　下西528番地区画溝実測図及び出土遺物実測図（1／20、1／4）

区画溝（図版12、第50図）

南北トレンチの中央部分でL字に屈曲する溝を検出した。溝は、最大幅で104cm、狭い部分で56cm、深さ15～32cmを測る。底面のレベルはコーナー部分がもっとも深く、東西方向と南北方向では東西方向の溝がより深く、南に伸びるにつれて徐々に高くなる傾向がみられる。コーナー部分の底面レベルを下西534番地で確認されている区画溝のレベルと比較すると、区画溝の中で一番低いレベルとなる。

このレベルの差は、もともとの自然地形が西側に流れている瑞梅寺川に向かって下がっていることから、当時の地表面のレベルも一番低かった地点にあたる。区画溝の底面レベルは掘削時の地表レベルに応じて設定された可能性も考えられる。



第51図　下西528番地１号土坑及び出土遺物実測図（1／40、1／4）

区画溝の現況での断面形態はＶ字から逆台形を呈している。後世の水田開発による１m以上の掘削を考えると、本来の溝の深さは下西534番地と同様に1.5m程はあったと考えられ、現況の底面の形態を考慮すると本来の溝の形態はＶ字の溝であった可能性が高い。また、溝の埋土は層は分かれず砂質土で、出土遺物も礫らで小片が多い。この状況は下西534番地の東西方向のＶ字溝の最下層に共通する特徴で、出土した遺物の時期も一致する。

下西534番地からの溝の延長方向、断面形態、掘削時期、埋土の一致する状況等から判断して、下西528番地で検出したＬ字に屈曲する溝は一連の遺構と判断する。

出土遺物（第50図）　１～３は壺である。１は広口壺の口縁部で、復元口径20.1cm。口縁端部にキザミ目を施す。内外面ともに丹塗りで、調整は横方向のミガキが観察できる。２も壺の口縁部で、端部に櫛状工具によるキザミ目が施される。調整は内外面ともに風化している。３は壺の底部で、底径6.3cm。外面に丹が施されており、横方向のミガキが観察できる。４、５は甕の口縁部でいずれも小片である。ともにＴ字口縁で内側への張り出しが少ない。６は壺の口縁か。内外面ともに丹塗りである。７、８は鉢の口縁か。ともに外面調整等は不明。

その他の遺構・遺物

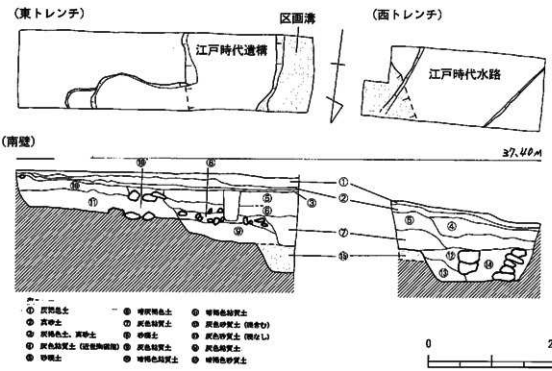
１号土坑（図版12－ｃ、第51図）

区画溝のコーナー部分西側で検出した遺構で、南北に細長い形状を呈している。土坑は２段掘りになっており、北側が深く南側に向かって浅くなる。

土坑の規模は、2.7×0.8m、深さは20～45cmで、埋土は黒褐色１層。テラス部分に遺物が集中していた。出土遺物は大型の破片が多く、壺、甕、鉢等である。

出土遺物から遺構の時期は、古墳時代前期にあたる。

出土遺物（第51図）　１は二重口縁壺の口縁部で、復元口径18.7cm。器壁が厚く、胎土も粗い。外面調整は、口縁部ヨコナデ、頸部にタテハケが残る。内面調整はヨコナデで頸部に斜め方向のハケ目が残る。２は甕である。器壁が薄く、胎土には１mm程度の細かい長石、石英、雲母を含む。やや内湾する口縁部を持つ。外面調整は風化、内面調整は口縁部ヨコナデ、胴部は底部から口縁部方



第52図　下西535番地遺構配置図及び土層断面図（1／60）

向のケズリが残る。3、4は鉢である。3は復元口径22.0cmで口縁部はくの字に屈曲する。器壁は薄く、胎土も細かい。口縁部の外面にヘラ状工具による沈線がある。外面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部は、肩部ヨコハケ、下半部はタテハケ、ナナメハケ。内面調整は口縁部ヨコナデ、胴部指押さえ後ケズリ。4は、復元口径20.7cm。器壁が厚く、胎土も粗い。外面調整の口縁部付近はナナメ方向のタタキ痕が施され、下半部はナナメハケがみられる。内面調整は細かいナナメハケ後粗いハケ、その後さらに細かいハケにより調整を行っている。

③　535番地

調査区は、528番地で確認された区画溝の延長方向を確認するために、幅1.2m、長さ4.6mのトレンチを設定した。

調査の結果、トレンチ西隅から弥生時代の溝遺構の東側端が確認されたため、溝遺構の幅を確認する目的で、西側に幅1.2m、長さ約3mのトレンチを設定した。当初に掘削を行ったトレンチを東トレンチ、西側へ延長したトレンチを西トレンチとする。なお、この両トレンチの間は庭石が置かれているため掘削ができなかった。

東トレンチ（図版13、第52図）

東トレンチでは現地表面から70cmほど掘削したところで砂礫層の地山を検出した。この砂礫層の1層上の層（11層）から江戸時代の溝状遺構が切り込まれており、これらの層から近世陶磁器、ガラス製品等の小片が出土している。

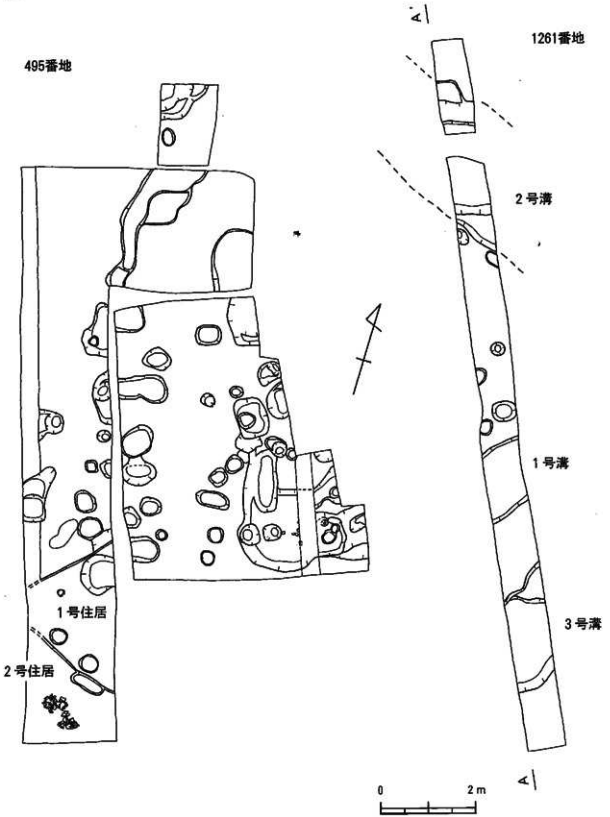
江戸時代の遺構に切られる形で、砂礫層の地山から切り込む層からは弥生土器の小片のみが出土している。この二段掘りの落ち込みからは遺物は出土していない。

溝状遺構の埋土は、断面形態は異なるものの、528番地で確認された区画溝と延長方向、埋土の

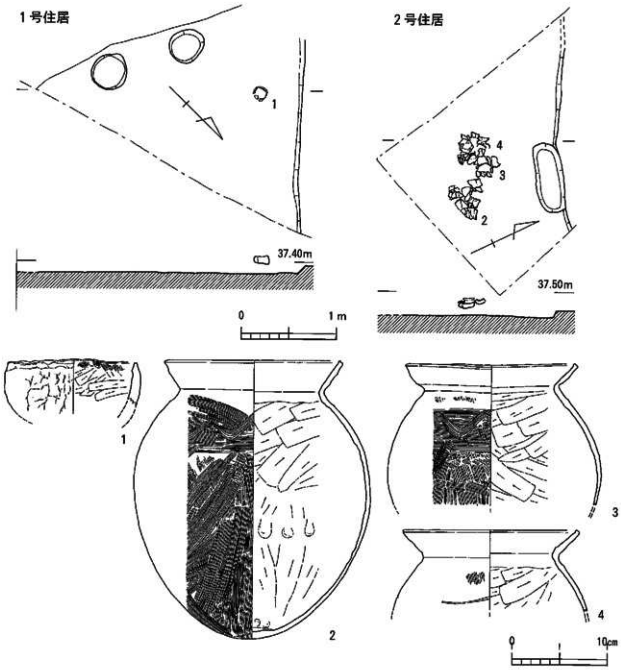
状況等は類似している。

西トレンチ（図版13、第52図）

西トレンチの地表面は、東トレンチに比べると水田のある西側へ向かって掘削されている。現地



第53図　屋敷495番地、1261番地遺構配置図（1／80）



第54図　屋敷495番地１号、２号住居及び出土遺物実測図（1／40、1／4）

表面から0.8m下で江戸時代の石組水路状遺構を検出し、南紫土層断面の全ての層が江戸時代の水路による埋土であった。トレンチ東側の水路に掘削されていない僅か20～30cmの地山部分に、東トレンチから続くと思われる溝遺構のラインが確認できた。しかし幅も狭く掘削は行えなかった。出土遺物は江戸時代近世陶磁器の小片のみである。

(6)　屋敷495・1261番地の調査（平成17年度）

①　概　要

屋敷495番地と1261番地の調査は、下西534番地、528、535番地で確認された区画溝の延長方向

と、青銅器工房の所在確認を目的として平成17年度に行った。

調査地点は、現在畑と里道として使用されている面積の限られた狭い空間である。始め、畑として使用されている比較的面積の広い495番地にL字のトレンチを入れ、目的とする遺構が検出されなかったため、東側、北側に調査区を拡張し、約85㎡を調査した。その後、里道の1261番地に幅70～80㎝、長さ15mの調査区を設定した。

以下、調査区ごとの報告を行う。

② 495番地

495番地からは古墳時代前期の住居2棟、中世のピット、土坑等である。この調査地点からは目的とした区画溝、青銅器工房址に繋がる遺構は検出されなかった。

住　居

調査区南隅から2棟の竪穴住居址が切り合って検出した。ともに残りが悪く、壁の立ち上がりが8～10㎝ほどである。

切り合いより1号→2号の前後関係が捉えられる。また、出土遺物から遺構の時期は、2号住居は古墳時代前期。1号住居は遺物が床面より若干浮いており1点のみだが、2号住居よりやや古い時期か。

この2住居址は、隣接する488番地でも確認された弥生時代～古墳時代にかけての住居址と一連のものと考えられる。

1号住居（図版14、第54図）

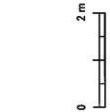
2号住居に切られ、北西の壁だけが残存している。出土遺物は1点で床面から浮いた状態で出土。口縁部を下に向け底部を欠損している。

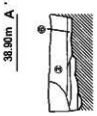
出土遺物（図版19、第54図）　1は鉢で手捏ねによる成形。口縁部が指押さえで成形しておりいびつである。口径13.3㎝。外面調整は型押し成形によるヒビがみられる。内面調整は口縁部細かいナナメ方向のハケ、胴部はケズリ。

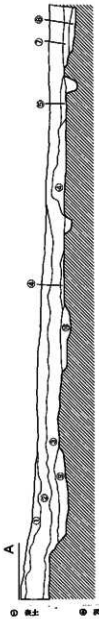
2号住居（図版14、第54図）

調査区南端で検出した住居で、住居北壁の一部が検出した。床面から3点の甕が重なるようにして出土しており、この遺物の時期が住居の時期と捉えうる。

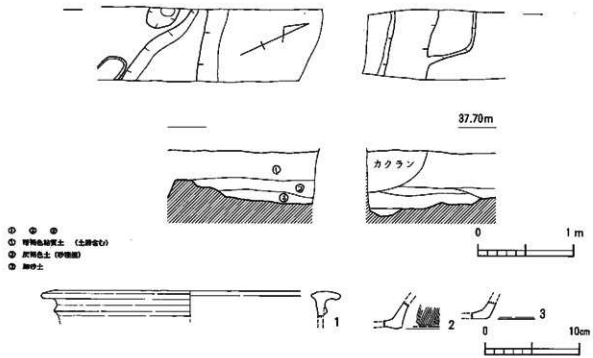
出土遺物（図版19、第54図）　2は一部欠損しているが、ほぼ完形の甕で、胴部最大径を肩部に持ち、肩部には櫛書き波状文が施されている。口径18.1㎝、器高29.4㎝。外面調整は口縁部ヨコナデ、胴部肩部はヨコ、ナナメハケ後波状文が施され、下半部はタテ、ナナメハケが施される。内面調整は口縁部ヨコナデ、胴部上半は斜め上方向のケズリ、下半部は指押さえ後下から上方向のケズリ。3は、口縁端部をつまみ上げ、内湾する。復元口径17.3㎝。外面調整は口縁部ヨコナデ、胴部肩部







第55図　屋敷1261番地西隣土層断面図（1／80）



第56図　屋敷1261番地２号溝及び出土遺物実測図（1／80、1／4）

はヨコハケ後撫書きによる波状文を施す。下半部はタテハケ。内面調整は斜め上方向のケズリ。4も3と同様に口縁端部をつまみ上げている。復元口径17.9cm。外面調整は胴部一部にハケ目と、ヘラによる沈線がみられる。内面調整は口縁部ヨコナデ、内面調整はケズリである。

③　1261番地

1261番地では、３条の溝状遺構とピット等が検出した。

３条の溝はそれぞれ時期が異なり、１、３号溝は中世の遺構で、２号溝は弥生時代中期頃の遺構である。

遺構は、現地表から40～50cm下で検出し、南側から北側に向かって緩やかに低く傾斜する。また、地山の土質は、南側は砂礫層だがトレンチの中央部あたりから黄褐色の砂質土に変化している。

溝

１号溝（図版14、第53図）

幅２ｍで、南西から北東方向に軸をとっている。埋土は砂礫層であったことから、西側の瑞梅寺川から取水した中世期の水路ではないかと考えられる。

出土遺物は糸切り底をもつ土師皿の小片のみである。

２号溝（図版14、第56図）

幅3.2m、底面平坦部1.7m、両サイド2段掘りの扁平な皿状の断面を呈し、北側底面が一段低くなる。調査区が狭いが、溝は北西から南東方向に軸をとると思われる。溝底面のレベルは下西地区で検出した区画溝よりかなり高い値を示す。埋土は上層、下層ともに黒褐色～暗褐色の粘質土で、遺物は上下層から比較的多く出土したが、すべて小片で接合可能な遺物はなかった。

２号溝は区画溝と同時期の溝であるが、断面形態、埋土、底面のレベル、延長方向等若干異なる

部分があり、一連のものと判断するには近隣の調査結果を待って検討する必要があろう。
遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期に捉えられる。

出土遺物（第56図）　1～3は全て甕である。1はT字の甕口縁で内側への張り出しが弱く端部が下がる。復元口径31.5cm。内外面ともにヨコナデである。2は底部で、平底の甕である。外面調整はタテハケ。3も甕の底部で調整は風化している。

3号溝（第53図）

幅1.35mの皿状断面を呈する浅い溝である。495番地で確認されている土坑状の遺構と一連のものである可能性が高い。時期は土師皿の小片から中世の遺構と考えられる。

(7)　三雲・井原遺跡出土青銅器鋳型について

三雲・井原遺跡地内ではこれまで弥生時代に属する3個の青銅器鋳型が出土したことが知られている。出土地名が屋敷田、井ノ川、川端とされ、屋敷地区を含む周辺地点がその出土地である可能性が高いことが指摘されている。

柳田康雄氏は、明治期以降に掲載された鋳型の報告文を詳細に検討し、現在に残る地名との検証を行い、その結果屋敷付近を青銅器工房の第一候補としている。

なお、三雲・井原遺跡地内に残る小字名として「屋敷」の地名が残るのは「中川屋敷」、「楠木屋敷」など集落中央部付近にもみられる。場所の特定には今後とも注意を要する。

これまで個々の資料について実測図等による詳細な報告がなかったため、下記2資料について報告する。

伝三雲井ノ川出土広形銅矛鋳型（図版20、第57図）

県立糸島高校が所有し、校内の郷土博物館に収蔵されている広形銅矛の鋳型で昭和46年に前原町（市）の文化財に指定された。刃部のみで法量は以下のとおりである。

鋳型残存長23.9cm、最大幅18.5cm、上部幅18.5cm、下部幅18.0cm、最大厚9.6cm、上部厚9.6cm、下部厚9.2cm。

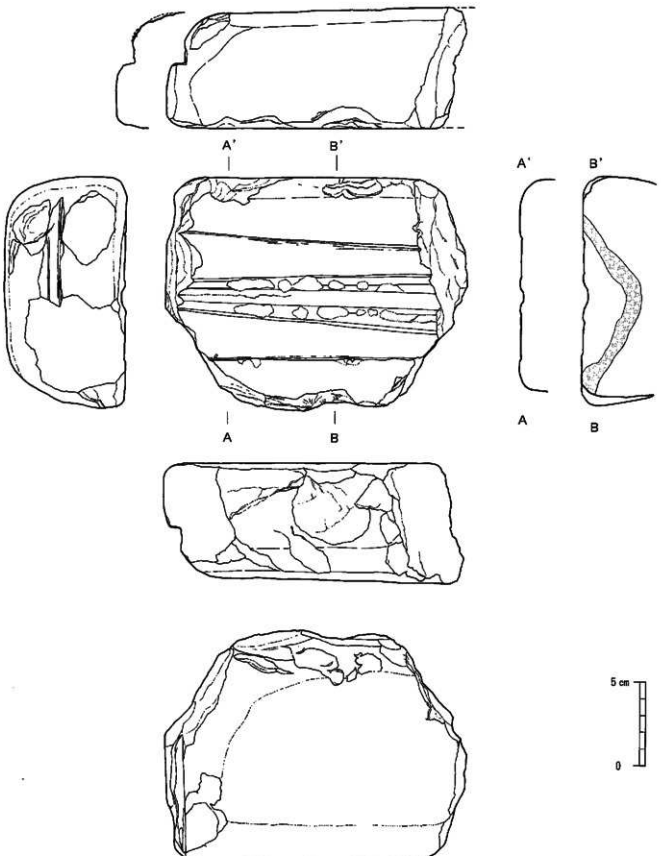
鋳型の鋒側の木口にL字状の欠き込みがあることから、連結式の鋳型であることがわかる。小口部は樋の上端に近い。身幅は下端で6.8cm、上端で7.6cmを測る。樋は丸みを有するが角が残っている。脊は逆台形上に角張って掘り込まれており、鋳型面は平滑に整えているが、側面と裏面は角を取って断面蒲鉾形に仕上げている。側縁部もB－B'断面部には両側に狭り状の浅い欠き込みがある。

伝三雲川端出土広形銅矛鋳型（図版21、第58図）

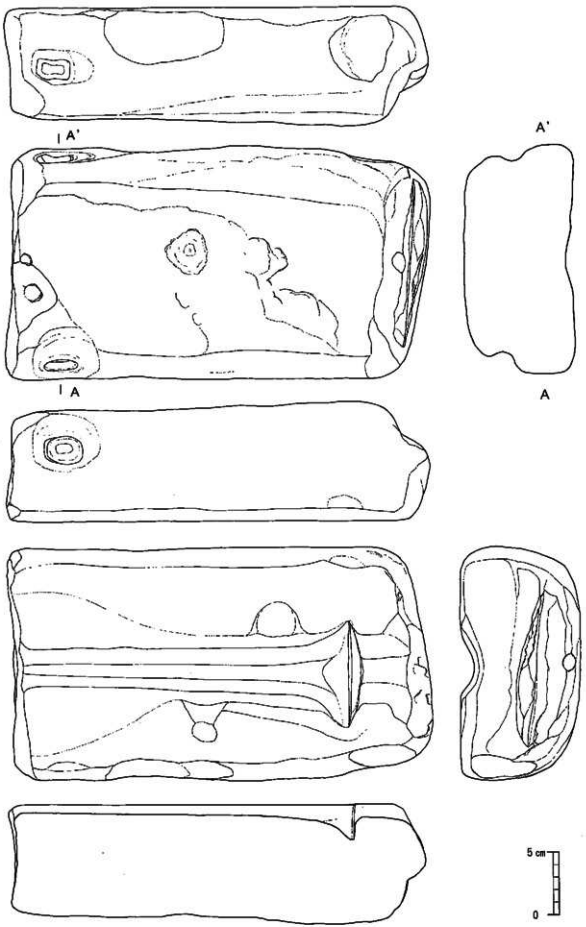
前原市高祖の金龍寺（伊都国歴史博物館保管）が所有する銅矛の鋳型で袋端部から湯口にかけて残存するが、表面は熱変性による劣化が進んでいる。鋳型の法量は以下の通りである。

鋳型残存長22.8cm、最大幅12.2cm、上部幅12.2cm、下部幅10.4cm、最大厚6.3cm、上部厚5.6cm、下部厚6.3cm、重さは12.1kgを測る。

砂岩質の石材で、表面の劣化が著しく既に掘り込まれた型の輪郭も判然としない状況となっている。鋳型面として整形されているのは表面だけで、側面と裏面は平らに整形された面を残して角をとり、断面が蒲鉾形になるように仕上げられている。側面には右側面では長さ3.6cm、幅2.4cm、深さ8mm、左側面には長さ3.6cm、幅2.5cm、深さ8mmの方孔が穿たれている。



第57図　伝三雲井ノ川土銅矛鋳型実測図（糸島高校蔵 縮尺1／3）



第58図　伝三雲川端出土銅矛鋳型実測図（金龍寺蔵 縮尺1／3）

Ⅲ．まとめ

1．屋敷・下西地区の遺構分布について

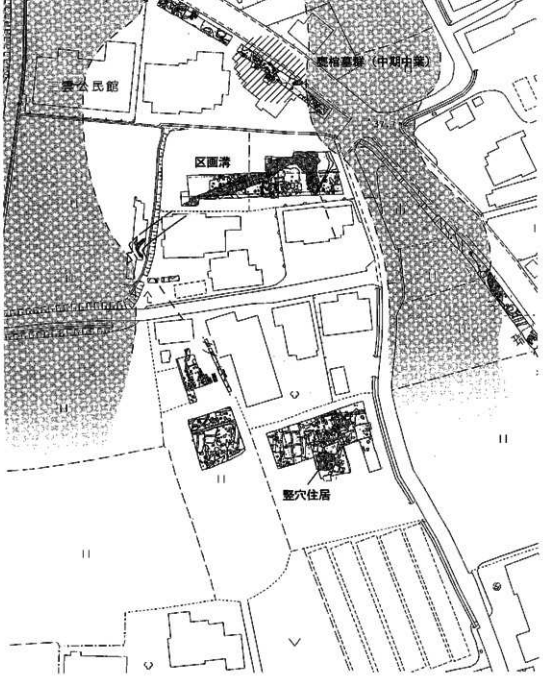
旧地形の復元　下西・屋敷地区の調査地点は、1970年代の福岡県による調査とその後の前原市による調査で、合計15カ所のトレンチ調査を行っている。これらの調査成果をふまえ、現在復元しうる当該地区の旧地形及び遺構の分布状況について概観したい。

屋敷・下西地区は三雲・井原遺跡の中央西側に位置しており、西側に流れる瑞梅寺川に向かってなだらかに勾配する丘陵西端部に位置している。下西528番地、三雲公民館の調査では河川の氾濫により遺構が全く検出しないラインが確認されており（第59図アミカケ部）、旧地形ではこのラインまでを生活域として捉えられていたと考えられる。次に、現在は県道が走る東側の旧地形をみてみると、県道１区～３区の調査区、県調査の下西Ⅱ－10トレンチ内でそれぞれ台地の落ち込みが確認されており、ほぼ県道のラインに平行して南北に細長い窪地が伸びていたと考えられる（第59図）。この窪地はさらに南側へ伸びて三雲南小路遺跡東側の落ち込みに繋がると考えられ、下西・屋敷地区と南小路地区は、仲田、番上、サキゾノ地区等東側に広がる住居域とは窪地によって隔てられた一つの微高地上に位置していたことが想定される。

遺構の時期的変遷　弥生時代中期中頃にはこの微高地先端部東端側に甕棺墓群が、中央部では住居が造られるがこれらの造営時期は短い。中期末に入ると、微高地先端部分を尾根に直交する形で幅3.5～4.0mの防御性の高い断面Ｖ字の溝と、尾根に平行する断面逆台形の溝によって方形に区画された空間が造られ、ここから約200m南側には、伊都国の王墓とされる三雲南小路遺跡が造営される。この環壕状遺構は伊都国が繁栄した弥生時代後期まで何度か掘り返されながら使用され、後期後葉に埋没する。区画された空間は、北側コーナー部分で外法約50m、内法は42mである。南側への伸長方向は現段階では確認できていないが、屋敷1261番地で確認された２号溝をその延長方向と捉えるならば、かまぼこ形の不定形な区画となる。しかし、断面形態、底面レベルの差、北側両コーナーがほぼ直角に屈曲する状態をみると久留米市市ノ上東屋敷遺跡、福岡市比恵遺跡、佐賀県千塔山遺跡などに見られるような方形の区画であった可能性も捨て切れない。今後の調査を待って検討する必要があろう。古墳時代に入ると埋没した環壕状遺構の上に住居や溝が造られ、南側にも住居群が広がることから、区画されていた空間への意識は無くなっていたと考えられる。

区画溝の機能　三雲・井原遺跡では遺跡の南東部分の八龍、寺口、イフ地域で３条の大溝は大きく集落域と墓域の区画機能を有するものと考えられる。下西地区の区画溝は、さらに集落域の中での区画を目的としたものと考えられる。このように集落域の一部をさらに区画する。弥生時代の北部九州における集落遺跡では、佐賀県吉野ヶ里遺跡（楼閣等の祭祀空間）、福岡県平塚川添遺跡（工房域？）、比恵遺跡（居住域）等があるが、方形に区画された例は比恵遺跡で見られる程度である。古墳時代に入ると首長層の居住域として方形区画が各地で確認されている。下西地区での区画溝は弥生時代の他遺跡と同様に特別な施設を区画するものと想定されるが、その施設として、後の古墳時代に見られるような首長層の居住域である可能性も候補のひとつにいれておきたい。区画内部の構造については現在、住宅が密集していて早急な解明は難しいが、将来の調査機会を待って再度検討を行いたい。

環壕状の区画溝によって区画された空間が意識されていた中期末～後期後葉にかけて、同じ微高地上には三雲南小路遺跡の他に顕著な遺構は見あたらない。下西・屋敷地区の位置する微高地は、伊都国が繁栄した時期、伊都国の王墓、区画溝によって囲まれた空間、そして、青銅器鋳型の出土も伝えられていることから青銅器製作工房の存在した可能性もあり、他とは区別された特別な空間であったことが想定される。



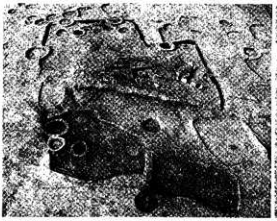
第59図　屋敷・下西地区の旧地形と区画溝配置図（1／1000）

2．住居跡出土の土製人形について

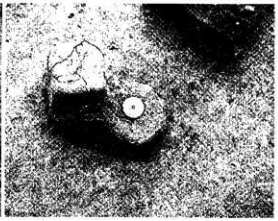
屋敷489番地の４号住居から男女の土製人形とメノウ製勾玉、ミニチュア土器４点がセットで出土した。指状の形をし、顔、性器の表現をもつ同様の土製人形は、これまで福岡県志摩町御床松原遺跡（第60図）、春日市上白水遺跡、香川県高松空港遺跡等で確認されているが、明確な遺構に伴い時期や使用の状況が分かる出土例は少ない。今回は、古墳時代前期の竪穴住居を廃棄する際の祭祀儀礼として、男女の土製人形１対をセットとして使用している。他の遺跡では男女１対がセットで使用されている例は無く、古墳時代の集落内祭祀を考える上で貴重な資料といえよう。

第60図　御床松原遺跡出土土製人形実測図（1／3）

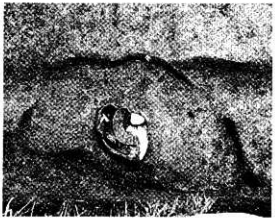
图　版



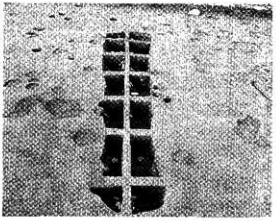
a．屋敷500番地２号住居（西から）



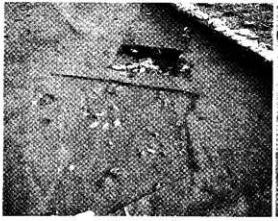
b．屋敷500番地３号住居土製紡錘車出土状況



c．屋敷500番地１号甕棺墓



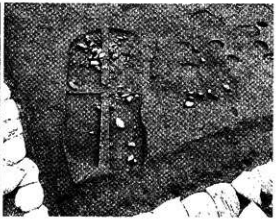
d．屋敷500番地１号土坑



e．屋敷500番地１号溝

f．屋敷500番地１号溝土器出土状況

g．屋敷500番地１号溝土層断面



h．屋敷500番地２号土坑、３号土坑

a．下西534番地から三雲南小路遺跡を望む（北から）

b．下西534番地調査区全景（真上から　写真上が北）

c．下西534番地区画溝コーナー部（真上から　写真上が北）

22－46

21－26

21－28

21－30

21－32

21－34

22－35

22－36

22－41

22－45

22－44

22－47

23－48

23－57

23－58

23－60

23－61

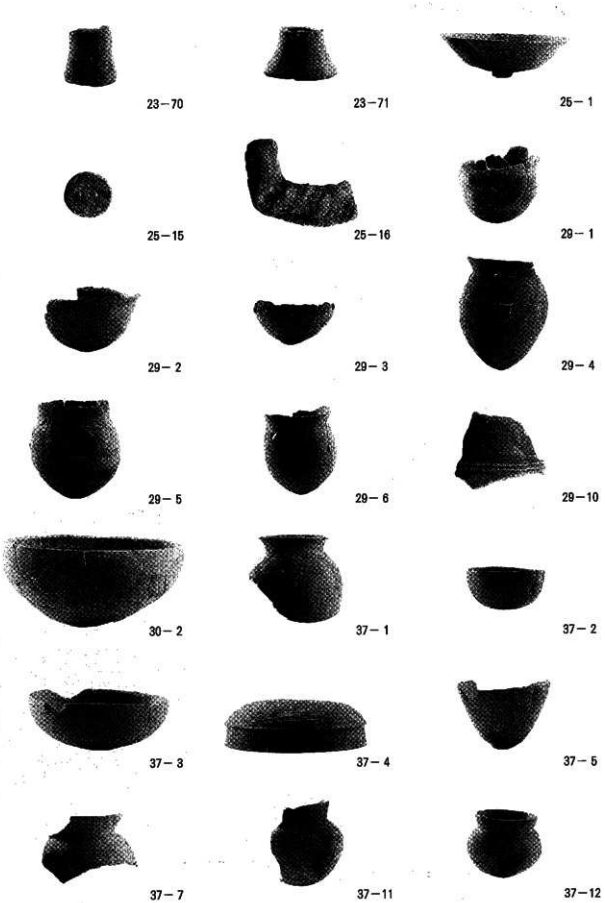
23－62

23－64

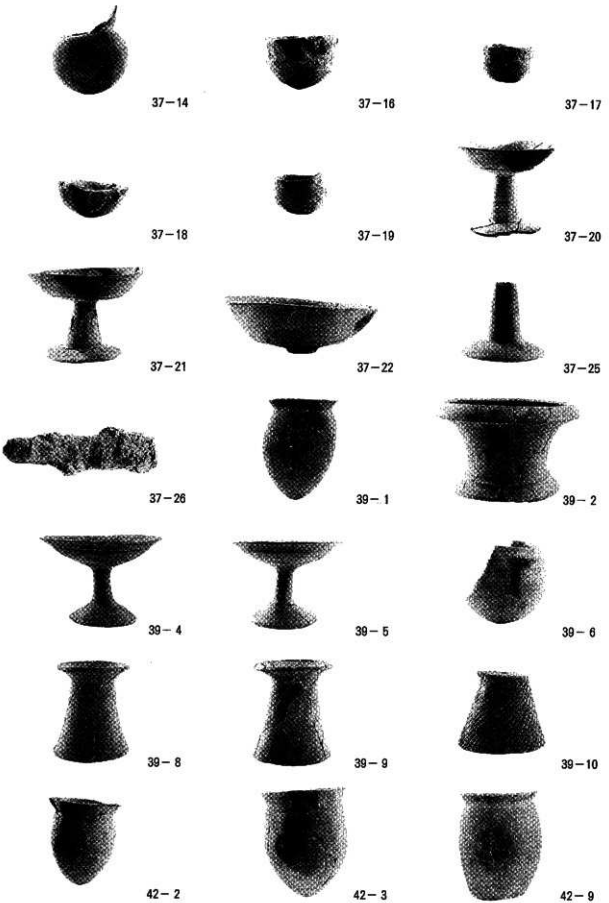
23－67

23－68

出土遺物②


23－70
23－71
25－1
25－15
25－16
29－1
29－2
29－3
29－4
29－5
29－6
29－10
30－2
37－1
37－2
37－3
37－4
37－5
37－7
37－11
37－12

出土遺物③


37－14
37－16
37－17
37－18
37－19
37－20
37－21
37－22
37－25
37－26
39－1
39－2
39－4
39－5
39－6
39－8
39－9
39－10
42－2
42－3
42－9

出土遺物④

42－5

42－8

42－6

42－7

42－11

90

46

47

54－1

54－2

54－3

20－24

50

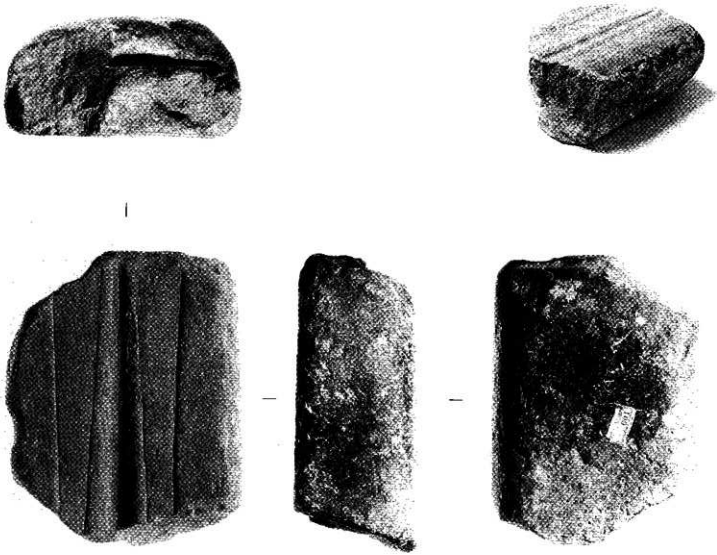
56

36－3

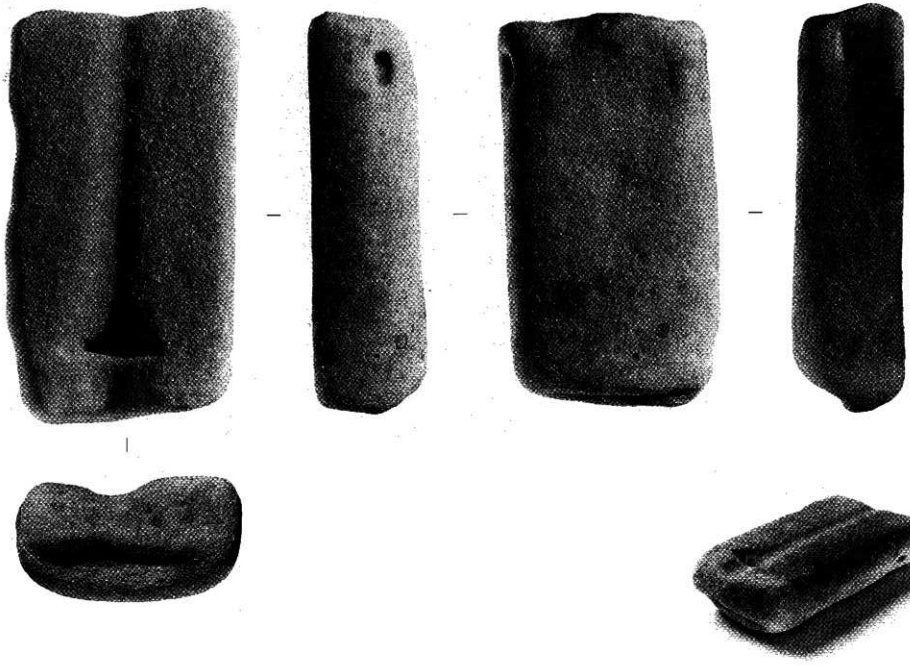
36－1

36－2

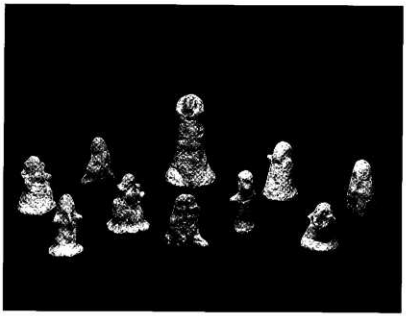
出土遺物⑤

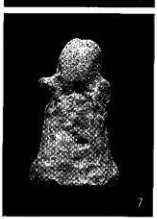


伝三雲井ノ川出土広形銅矛鋳型（糸島高校蔵）



伝三雲川端出土広形銅矛鋳型（金龍寺蔵）





御床松原遺跡出土土製人形

報告書抄録

ふりがな	ミクモ・イワライセキ　ーヤシキ・シタニシチクー
書名	三雲・井原遺跡　ー屋敷・下西地区ー
副書名	前原市文化財調査報告書
巻次	第90集
シリーズ名	三雲・井原遺跡
シリーズ番号	V
編著者名	岡部裕俊　牟田華代子
編集機関	前原市教育委員会
所在地	〒819-1117　福岡県前原市前原西一丁目８番14号
発行年月日	西暦２００６（平成１８）年３月３１日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三雲・井原遺跡	大字三雲字屋敷500番地			33°31′53″	130°14′40″	H12年度	300m²	重要遺構確認調査
	大字三雲字下西534番地					H14年度	400m²	
	大字三雲字屋敷488番地					H15～16年度	500m²	
	大字三雲字屋敷489番地							
	大字三雲字下西528、535番地					H16年度	60m²	
	大字三雲字屋敷495、1261番地					H17年度	85m²	

所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三雲・井原遺跡	大字三雲字屋敷500番地	集落	縄文 弥生 古墳 中世	竪穴住居、土壙　溝	縄文土器　石器　弥生土器　土師器　土製紡錘車　青白磁	縄文～中世集落
	大字三雲字下西534番地	集落		竪穴住居 土坑　区画溝	弥生土器　土師器	環濠状区画溝
	大字三雲字屋敷488番地	集落		竪穴住居	弥生土器　土師器 メノウ製勾玉　土製人形	弥生時代～古墳時代住居群
	大字三雲字屋敷489番地	集落		竪穴住居	弥生土器　土師器	
	大字三雲字下西495、535番地	集落		溝	弥生土器　土師器	
	大字三雲字屋敷495、1261番地	集落		溝	弥生土器　土師器	

三雲・井原遺跡 V

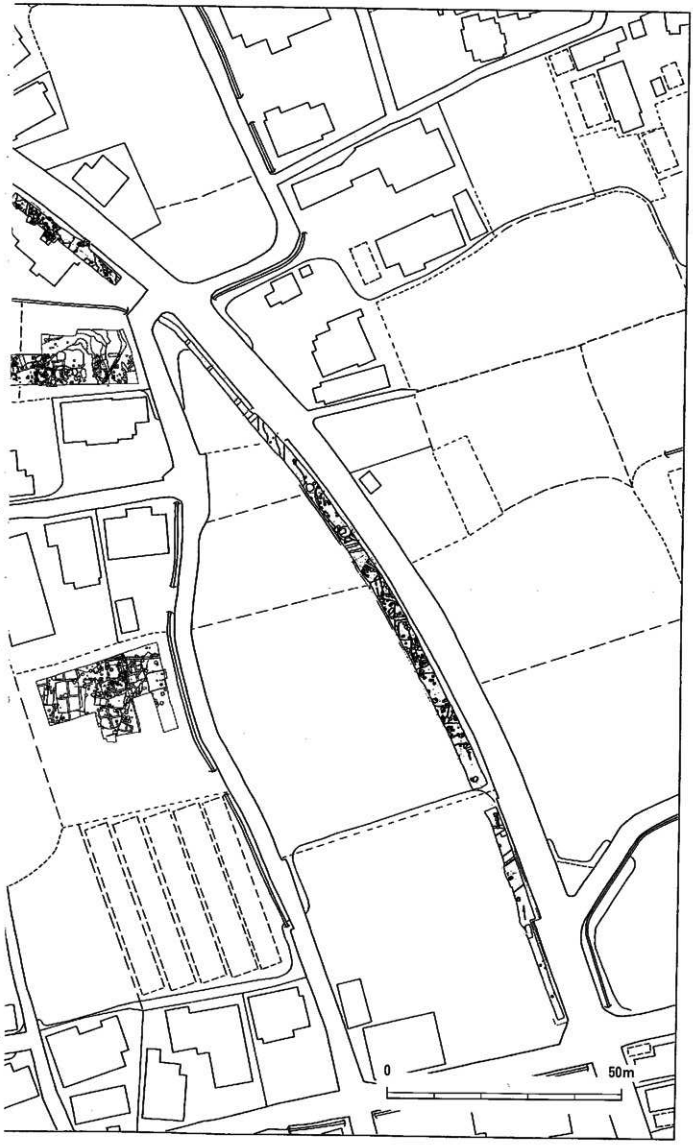
－ 居敷・下西地区の調査 －

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告
前原市文化財調査報告書　第90集

2006年3月31日

発　行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL　092－323－1111

印　刷　㈱津村愛文堂
福岡市早良区室見2丁目16－8
TEL　092－821－0173　FAX　092－831－3329



他点遺構配置図（1／800）

付図　下西・屋敷地区調査